
狼の誓い

虚言の騙り手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の誓い

【Nコード】

N5669E

【作者名】

虚言の騙り手

【あらすじ】

《タイトルを変更しました。（旧：半妖）》幼き日、大切なものを守って人としての終わりを迎えてしまった。しかし、半人半妖として生まれ変わった彼は過酷な環境下で戦いに身を投じることになり心が磨耗していった。彼は磨耗していった心の支えとして誓いを立てた。自分の大切な者達の幸せを護り抜くと……。

ブローグ 　　く運命の分岐点く

その日は特に暑い、夏休みになって半月も経った日のことだった。

「ねえ、りっちゃん。もう帰ろうよ?」

前に行く竹刀を背負った少女の服の裾を掴み小さな声で少年は聞いたが

「何言ってるの!あともうちよつとじゃん!」

「でも、もう真っ暗だよ?」

不機嫌そうな少女の声に少年は怯えながら自分達の周りの暗い森を見る。

「そんなに帰りたいたらくーちゃんだけ先に帰れば。」

少年の手を振り払って先に進んでしまう。

「ま、待つてよお。」

少年は小走りで少女のところまで行き、再び彼女の服の裾を掴む。

「帰るんじゃないの?」

「こんなところから一人じゃ帰れないよ。」

少年は少女に涙目で訴える。

「情けない。それでも男の子？」

「お、男の子だよ。りっちゃんみたいな度胸はないけど・・・。」

「それはボクが男の子っぱいってこと？」

「ち、違うよ。りっちゃんは可愛いけど、かつこよくもあるってこと。」

竹刀に手をかけた少女を見て慌てて訂正する。

家が古流剣術を伝える道場である少女はそれを習っていて、少年は練習台にされているためその痛みはよく知っている。

「本当にそう思ってる？」

首を縦に何度も振って肯定する。

それを見てやっと竹刀から手を離し、少年はそれを見てホッとす。

「と、ところで、こんな時間になってまで探しに行くなんて何を忘れたの？」

昼間、この先で遊んでいたときに少女が何かを忘れてしまったらしく、家に帰る直前になって思い出し、そのとき傍にいた少年を引っ張って来たのだった。

強がってもやはり少女も一人で来るのは怖かったらしい。

先程は少年を突き放すようなことを言ったが少年が帰れないことを見越してのことだ。

「べ、別に何でもいいでしょう！」

忘れ物は少年にもらったリボンで大事にしていた物だ。

ほんの数ヶ月しか変わらないが少年の前では頼りになるお姉さんでありたい少女は何だかその事実が恥ずかしく感じて、話を打ち切って足を早めた。

「あ、置いてかないで。」

少年はその後について行った。

この先に運命の分岐点があるとも知らず・・・。

ブログ　　ゝ運命の分岐点ゝ（後書き）

初めまして。虚言の騙り手です。初投稿なので拙い文章ですが、精一杯頑張りますのでよろしくお願いします。

プロローグ・2 〽喪失の悪夢と迫る再開の時〽

それは遙か昔のこと・・・。

あるところに一匹の妖魔がいました。

その妖魔は温和で人間達を温かく見守っていました。

しかし、長い間人間を見守っているうちに同じ種族同士で醜く争い、人あらざる者の存在を忘れ、傲慢に世の中を闊歩する人間達に愛想を尽かし人知れぬところに住むようになりました。

ある日、そんな妖魔のもとに一人の人間が迷い込みました。

その人間は妖魔を見ると怯えたが、妖魔が無害であると知ると帰り道を教えてくれないかと頼みました。

妖魔は礼儀正しい人間の願いを無下にすることもなく人間の道案内をしました。

その道中で人間の住む村が干ばつで苦しんでいて、この人間は別の街に仕事を探しに行くところだったことを知り、人間に優しい妖魔は雨を降らせてやろう、と言いました。

人間は最初は半信半疑でしたが、人里に戻った次の日に雨が降り始め干ばつで苦しんでいた村が救われると人間は妖魔のおかげで救われたのだと言いまわりました。

その人間は他の人にも優しい妖魔のことを知ってほしくて言ったの

ですが、悪い人間達はそれを聞いて妖魔を利用しようとして捕獲しようしました。

妖魔は押し寄せて来た人間を蹴散らしましたが、いつの間にか妖魔は悪い妖魔ということになっていて全国各地から人間が集まって来て妖魔を退治しようしました。

悪者にされた妖魔は抵抗しましたが、数で圧倒的に上回る人間に敗れて、封印されてしまいました。

それから長い間封印されていた妖魔は人間に対して憎悪を覚えるようになり、更に月日が過ぎました。

~~~~~

少年と少女が、しばらく歩くと広場のような場所に出た。

広場の中心に小さな祠がある以外特に何もない場所であるため少年と少女だけの秘密の遊び場になっている。

少女は広場に入ると走って祠に近づき、白いリボンを手にとるとホッと息をつく。

「忘れ物あった？」

少年が少女の手元を覗き込むが少女は見せないように慌ててすぐに

ポケットにしまった。

「勝手に見ないでよ!」

「ご、ごめん。」

少女に怒鳴られて一歩後ずさると少年の目に祠が入った。

祠には全面に何枚も複雑な字が書かれたお札が張っており、少年はこの祠を見るたびに何か恐ろしいものを感じて避けているのだが、今は辺りの暗さも加わってより一層恐怖を掻き立てた。

「り、りっちゃん。早く帰ろう?」

「くーちゃん、こんなのが怖いのか?」

一方、少女はただの祠にしか見えず、怖がる少年を見て悪戯心がわいてきて、祠にあるお札を掴むと一気に引きはがした。

「あああ!!!り、りっちゃん!?!」

少年は目の前でお札を投げ捨てる少女に戸惑いの目を向ける。

「だ、駄目だよ!そんなことしたら怒られちゃうよ!」

「大丈夫だよ。ボク達しかこの場所は知らないんだから。」

「で、でも!いけないことはしちゃ駄目だよ!」

「くーちゃんは男の子なんだからこれくらいでビクビクしないの。」

「た、崇られたりしたらどうするの？」

「崇りなんてあるわけないじゃん。」

「で、でも……。」

少年は祠と少女を交互に見て戸惑う。

少女はそんな少年の様子を見て満足して

「そんなことより帰ろ。」

少女は先に来た道を戻っていった。

「ま、待ってよ。」

少年も少女に置いていかれたくないので後を追った。

誰もいなくなつた広場で異変が起きはじめたことに気づかず……、

ソレは長い呪縛から解き放たれた。

まだ祠に張り付いていたお札は次々に破れていき、祠は徐々に震え始めた。

異変を感じた辺りの生き物は一斉に逃げ出し、祠が崩れはじめると祠を中心に複雑な字が広場全体に浮かび上がった。

しかし、何かが割れるような澄んだ音が響くと同時に陳の一角が淡い光を放って消える。

音は断続的に鳴り響き、陳が次々と消滅していく。

そして、陳が一際大きく輝き、何かが割れるような音も耳が壊れそうなほど大きく響いた。

その音は広場から離れていた二人にも届いた。

「り、りっちゃん。今の音は・・・。」

「は、早く帰るよ。」

予想外の事態に少女の声にも動揺が、混じっていて足も自然とはやくなっていた。

何かから逃げるように帰り道を行くと突然、

『グオオオオオオ！！』

「うわぁっ！」

「キャッ！」

文字通り大地を揺るがすほどの咆哮が響いた。

「りっちゃん！逃げるよ！」

恐怖で固まった少女を危機を察知した少年が手を掴んで引く張る。

少年に引く張つられた少女は恐怖で顔を真っ青にして、掴んだ手から震えが少年に伝わり彼は自分がしっかりしないといけないと自分を奮い起こす。

少年の心は恐怖に染まっていくほど冷静になっていた。

「く、くーちゃん。」

「大丈夫。りっちゃんは僕が護るから。」

「・・・／／／」

先程とは違う少年の凛々しい表情を初めて見た少女はこんな状況にも関わらず見惚れてしまった。

「っ！危ない！」

少年は危険を察知して少女を引き寄せて横に跳び、少女が傷つかないように自分の体を下に入れて地面を滑る。

ズドン！！

ほぼ同時に後ろから轟音が発生した。

体を起こすと少女を後ろに庇ってソレに立ち向かう。

『グルルルウ。』

「ひっ！」

後ろで少女が息を呑む音がしたが少年の目はソレにくぎづけだった。

ソレは大人を丸呑みしそうなほど巨大で銀色の毛並み、血のように紅い瞳を有する狼だった。

「・・・りっちゃん、竹刀貸して。」

「え？」

「早く！」

少年に急かされて少女は背負っていた竹刀を慌てて渡す。

「竹刀なんかじゃ役に立たないよ？」

「何もないよりはマシだよ。」

少年は周りを見て使えそうなものがないか探し、そして後ろが崖なっていることに気づく。

「（うまくいけばあれだけを落とせるかも・・・）」

『グオオオ！』

「っ！」

「キャア！」

狼が吠えてその迫力で少女は腰を抜きし座り込んでしまう。

少年も驚いたが怯えている場合ではないと自分に言い聞かせていた。

少年が恐怖を感じても、体は震えることもなく、頭はこの状況を打開するために働き続ける。

「（けど、確実に落とすには・・・）」

狼が一步踏み出す。

「ひつく・・・えっぐ・・・いやだよ。死にたくないよ・・・。」

「（こうしたほうがいいよね・・・）」

泣いている少女を見て少年は決心する。

「大丈夫。りっちゃんだけは助けるから。」

「ひつく・・・？くー、ちゃん？」

少女が様子のおかしい少年を見ると同時に

『ガアアアア！！』

狼が飛び掛かってきて

ドン。

「さようなら。」

グシャア！！

ズシャ！

『ガアアア！？』

ガラ。

『グオオオオオオオ・・・』

狼が崖下に落ちて少女はしばらく呆然として

「え・・・？」

ゆっくりと脳が事実を認識し始めた。

狼が飛び掛かってきて少年が少女を突き飛ばし、狼が少年をその巨大な顎で捉え、少年がカウターで左目に竹刀を突き刺して、痛み悶えた狼が足を踏み外して崖から少年をくわえたまま落ちていった。

「くーちゃん・・・？」

涙も止まり、少年がのまれた闇を呆然と見つめ

「くーちゃああん！！！」

絶叫が響き渡った。

~~~~~

「くーちゃん！」

叫びながら飛び起きた女性は荒い息を整えながら周りを見る。

「夢・・・？」

未だに慣れない寮の自分の部屋を見て現実を認識する。

あれから長い月日が過ぎ、少女は成長したがたまにあの時の夢を見てしまうことがある。

大事な幼なじみを失った夜の夢を・・・。

枕元に置いてあるずっとお守り代わりに持っている白いリボンを胸元にぎりしめ

「ごめんね……。」

小さな呟きと共に涙が流れた。

何処かの草原で横になっている青年がいた。

その青年のもとに何処からか鳥が飛んできた。

「起きろ、坊。」

「ん……。ふあ、クロか。どうかしたか？」

「次の仕事だ。移動するぞ。」

「移動って、まだ夜だろ？明日の朝にしようぜ？」

青年は面倒臭そうに言って二度寝をするために目を閉じる。

「我は別に構わんが、もうすぐノルマが終わるからと言って張り切っていたのはお前であろう？」

それを聞くと、青年は体のバネを利用して飛び起きる。

「さあ、早く次の仕事場に行くぞ。」

「・・・そういうところは相変わらずだな。」

「まあ、こうでもなくちゃやってられないしな。」

「確かに。さて、次の仕事場だグーグーだ。」

青年の目が細まる。

「へえ、最後の仕事場がそことは気を遣ったのか？」

「知ってるのか？」

「故郷の近くだ。・・・やっと帰郷が出来るかなもしれないな。」

さっきまで見ていた懐かしい夢を思い出し笑みがこぼれる。

過去に分かたれし二つの歯車が再び噛み合うときは近い・・・。

プロローグ・2 〽喪失の悪夢と迫る再開の時〽（後書き）

こんにちは。

虚言の騙り手です。

第二話の投稿となりましたが、いかがでしたでしょうか？二つに分けようかと思いましたが、プロローグを早く終わらせなかったので一話にまとめることにしました。次から本編に入り、人物の名前もどんどん出していきます。視点も第三者視点から変えるかもしれません。拙い文章をご覧頂きありがとうございます。

第一話 現在 Side Ritu（前書き）

更新が遅くなってしまう申し訳ありません。これからも定期的に更新していくのでご了承下さい。

第一話 現在 Side Ritu

罪を償う？そんなの自己満足だ・・・

Side Ritu

久しぶりにあの悪夢を見た。

くーちゃんがいなくなってから一年近くは毎日のように悪夢にうなされていたのだけど、時が経つにつれて悪夢を見る頻度が減っていた。

そのことがボクに僅かな安堵と堪らないほど恐怖を感じさせた。

何時かくーちゃんのことを、自分の罪を忘れてしまっくんじゃないか
と思ってしまう。

あの出来事を忘れたくない。

ボクはくーちゃんを殺したんだ……。

「——ばな！橘！」

「えっ？」

「え、じゃないだろ。ちゃんと話を聞いてるのか？」

「すいません。」

教師はボクが謝ると、授業を再開した。

駄目だな……。あの夢を見た日はどうもぼーっとしてしまう。

「律さん、どうかしましたか？」

「大丈夫だから気にしないで。絢香。」

隣の席の魅宗^{みむねあやか}絢香が心配そうにボクを見てきた。絢香はボクと違って、とても女の子らしくてお嬢様のようなたたずまいだ。まあ、実際に実家は確か凄いお金持ちらしいけど。

艶やかな黒髪を腰まで伸ばして、黒曜石のような瞳に眼鏡が知的な印象を、頭につけたカチューシャが可愛いらしさをかもしだしてい

る。

「でも、起きた時から様子が変わですよ？」

絢香はボクとルームメイトだから朝から様子がおかしかったことに気づいていたみたいだ。

「ちょっと夢見が悪かっただけ。」

「夢、ですか？」

「そう。ただの夢。」

彼女は一度眠ると深い眠りにつくみたいだからボクが夜中に起きたことはわからないだろう。

「そんなことよりさ、この授業退屈だと思わない？」

この話しを終わらせるために話題をすり替える。

「そんなことはないと思いますよ。」

絢香もそれを察してのつてきてくれた。

「知識がなくて損をすることがあっても、あって損をすることはないですから。」

「確かに無知はよくないと思うけど、今やっているところって役に立ちそうにないじゃん。先生の自慢話も混じってるし。」

「でも、今までお伽話だと思っていたことが実在すると言われたら
どんな些細なことでも面白いじゃないですか。」

「ボクは体を動かしてほうが性に合うな。」

それに常識の外の存在は知っていたからそんなに驚くことじゃなかった。

この学校、あまなり天鳴学園では俗に言う魔法というものを教えているらしい。

らしい、というのはまだボクはまだ魔法というものを見ていないし、
ここがそれを教えるところだというのも入学してから聞いたからだ。

何でも素質がある人間は自然とこの学園に惹かれてやってくるらしい。

かといって、ここに意識を誘導して人が集まっても不自然さを感じ
させてしまう、それを解消するために普通の学校ではありえないほ
どの優遇された施設、制度が整っていて、学園というより学園都市
といえるほどの広大さを誇る全国人気第一位の学校になっている。

お世辞にも成績がよいくないボクもこの学園を受験したのはパンフレ
ットを見て何となく受けてみようかなという記念のつもりだったの
で、何故か合格してしまいボクはもちろん母さんも父さんもおばさ
んも驚いた。

そして学園に来てみれば、試験は形だけのものでありそのときに素
質があるかどうか調べていたということを聞かされた。

で、こうして二週間ほどが経ち、今は魔法に関する基礎知識を詰め込まれている。

絢香は楽しんでいるみたいだけど正直ボクにはどうでもいいことがりだ。

昔から頭で考えるより感覚で覚えてきたボクには退屈以外の何者でもない。

そんなことを考えているとチャイムがなり、授業が終わった。

教師が出て行くと、クラスメイト達にはわかに騒がしくなる。

「律さん、行きましょうか？」

「え？行くって？」

「もうお昼ですから食堂に誘ったのですけど？」

ボーっとしている間に午前中の授業が終わっていたらしい。

「本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だつて。あ、そうだ。食堂に行くなら「りっちゃん！絢香ちゃん！お昼だよっ！お昼っ！」・・・向こうから来たか。」

教室の入り口のところから大声でボクらの名前を満面の笑みを浮かべながら呼ぶ友人のところに絢香と一緒にいくと彼女はボクの腕を引っ張る。

「早く行こつ。お腹すいちゃったよつ。」

「分かったから落ち着いて、悠^{ゆう}。」

今にも走り出しそうな友人、里見悠璃^{さとみゆうり}を宥める。

悠は小柄な体で茶髪をツインテールにしている悠の動きに合わせて揺れる様が彼女の小動物のような可愛さを引き立てている。

天真爛漫という言葉を体現したかのような彼女に振り回されて何年も経つけど未だに彼女の考えていることはよくわからない。

くーちゃんだつたら、どうなんだろうな・・・。

「りつちゃん。」

「ん？何？」

「気にしちゃダメだよつ？」

・・・こういうことには鋭いんだよな。ボクがあ夢を見たことにすぐ気づかれたか。

ボクにそんな資格はないのに親友でいてくれる彼女には本当に感謝している。

彼女には、くーちゃんの妹である彼女にはボクは恨まれても仕方がないのに・・・。

「そんな元氣のないりつちゃんにはあゝ、これを進呈してさしあげ

ましようっ！」

「うん。全力で遠慮させてもらっよ。」

笑みと共に彼女が差し出したのは『超絶人外魔境シリーズ 第五弾 奇想天外阿鼻叫喚殺人級 カオス味』。

突っ込みどころがありすぎてもうどこを突っ込んでいいやら分らない飲み物だ。というか、第五弾？その前があつたの？カオスって何味？それに飲み物としてあっちゃいけないような単語があるじゃん。

「もうっ。人がせつかく気を遣ってあげてるのにつ。」

そう言いながらその明らかに有害危険物であろう飲み物をおいしそうに飲み始める。

長い付き合いだけど、悠のこの味覚は全然理解できない。

隣にいる絢香の顔を見ると彼女の顔も若干引きつっていた。

うん、そっだよな。だって、阿鼻叫喚殺人級だもんね。

「~~~~~」

何でそんなにご機嫌なのさ？

悠の将来、主に食べ物関係でそこはかとなく心配になった。

第一話 現在 Side Ritu（後書き）

今回はキャラを出すだけで終わってしまいました。

次回はようやく主人公の視点になると思います。

文章も長くなるか短くなるか分かりませんが、見ていただけると幸いです。

ご意見・ご感想のほうがあればどんどんお願いします。新参者ですのでご指摘があれば、直すように努めたいと思っています。
では、また次回の後書きで。

第二話 現在 Side Kuon (前書き)

遅くなつて申し訳ありません。

第二話 現在

S i d e K u o n

誓いを立てた。『俺』が『僕』であつたことを忘れないために、
『僕』が『俺』として生きている証として・・・。

S i d e K u o n

草木も眠る深夜、見上げた夜空に浮かぶ月はいつもと違ってどこか
俺を見守ってくれているような気がした。

そんな風に見えるのも偏に俺の心境の変化のせいだろうか？

「坊。」

「始末は終わったか？」

「無論だ。死体は跡形もなく処分した。」

最初のころは殺すことに抵抗を覚えていたのに、今ではこんな風に
淡々と会話をこなせるようになってしまった。悲しいことだと思っ
が、必要なことだと割り切ってしまった自分はやはりあのときから
随分と変わってしまったのだろう。

「報告も他の烏に伝えた。これからどうする？」

「・・・俺の故郷に向かいながらあっちからの通達を待つ。」

「晴れてノルマの達成、『黒組』への昇格を一応は祝っておくべき
か？」

「それは嫌味のつもりか？殺しの上に成り立った地位を祝われたと
ころで嬉しくも何ともない。」

そう。俺は再び、故郷に帰るために多くの命をこの手にかけた。

しがらみを断ち切るためにこの地位までのぼる必要があった。

警邏『黒組』、人間で言う警察組織にあたる警邏の中での独立執行
部隊。

そこまで登り詰めることが俺が自由を得るために提示された条件であつた。

そして、そこまで登り詰めるために色々な事を上からの指示でこなしていった。その中でも一、二の頻度を誇るのがルールを犯したもののへの制裁。

人間の世界のような法はないが、暗黙の了解として超えてはいけない領分が決まっていて、それを犯してしまえば上の指示ですぐに処分が決定する。

その多くはその命によってあがなわれる。

当然、俺もその役割が回ってきて命を奪ったことは少なくはない。そこに自分の意志が伴わないでも。

「・・・くだらない。」

結局、俺の手がどうしようもないくらい汚れているのは変わらない。

そして、人でなくなってしまったことも・・・。

あの夏の日、里見久遠という人間は死に、久遠という半妖が生まれた。

黒かった髪は毛先から四分の一ほどが銀色に染まり、長く伸ばした後ろ髪はうなじのあたりで一つにくぐられ尻尾のように揺れ、左目は血のように紅く染まり、決して普通とは言えない容姿へと変わってしまった。

こんな俺を皆は迎えてくれるだろうか？悠璃や律、母さんは僕を受け入れてくれるだろうか？

受け入れてくれないのではという可能性も十分に考えられるが、それでも会いたいと願うこの心を見捨てることは出来ない。

結局は全て俺のわがままだ。会いたいから会う。そのためにはどんなことでもする。

他人の事情なんかまるで考えない独りよがり。自分の勝手さにへどがでる。

「・・・行くぞ。」

期待と不安を抱えながら闇夜に身を翻した。

~~~~~

俺がこの地を離れて、故郷への想いをはせる間もなくあまりにも濃密な時間を過ごしてきたが、こうしてこの場に立つとあの夏の日のまま時間が止まっていたのではないかと錯覚してしまいそうになる。数年振りに見る我が家は幼い頃のまま若干小さくなったように見えた。

ここに来るまでに街中を見てきたが、随分様変わりしていた。そこに時の流れを感じたというのに我が家を見て、過去の幻影と重なる自分に自嘲的な笑みを浮かべる。

それにしても・・・、どうするべきか。

いざ再会となると、どうゆう顔をして会えばいいのか分からなくなる。

目の前にあるインターホンに手を伸ばしたり引つ込めたりを繰り返すこと一時間、結局、明日出直すことにして踵をかえすと、

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

そこには数年経ったが姿が変わっていない三人が立っていた。

一人は俺の母さん、さこみまいか里見舞華。

身長は160程度、相変わらず二人の子持ちとは思えない若々しさで茶髪先を軽くウェーブをかけ、ただでさえぱっちりとした瞳を今は大きく見開いて停止している。

その隣にいる母さんより少し背が高い人が橘蘭さん。たちばならん

律の母さんで俺は蘭さんと呼んでいた。歳を気にしているらしくおばさんと呼ぶと地獄をみるはめになる。普段着が着物で艶やかな黒

髪で、言動もおしとやかなまさに大和撫子という言葉がぴったりな人で俺の初恋の人だ。律に練習台にされる度に手当てをしてくれたのが惚れた理由だと思う。

最後に両手に袋をたくさん持つている明らかにこき使われている人が橘刃さん。たちばなじん

律の父さんで父親のいない俺と悠璃の父親代わりでもある人だ。おじさんが律の師匠であり、優れた古流剣術の使い手であるのだが、筋肉は引き締まっているものの見た目は優男そのものでそのせいでよく不良に絡まれるらしい。それと、何故かこの街では不良が記憶をとばされボコボコにされて倒れているのがよく見つかるらしい。

「久遠・・・？」

母さんの口から俺の名前がこぼれおちる。

「あー・・・、ただいま、でいいのか？それとも久しぶり、か？」

「久遠！」

走って俺のもとに駆け寄ってくる母さんは後一歩のところまできて俺は、

本気で放たれた右ストレートをかわした。

「かわすな！ポケット！！」

「相変わらずだな！いい加減に蘭さんみたいに女性らしくなれないのかよ！」

昔から母さんは鉄拳制裁を嬉々としてやってたからこうなるんじゃないかと思ってたんだ。

「少しでも感動の再会を期待した俺が馬鹿だった！」

「よくわかってんじゃないか！つつわけで殴らせる！」

「誰が好き好んで殴られるか！」

左フックを顔をそらしてかわす。

「あたしの涙を返せ！！！」

右ボディーを左手で受け止める。よく見ると母さんの目の端に涙が溜まっている。口が悪くて手がすぐでる癖にちゃんと母親をやっているから扱いに困る。

「いや、まあ、心配かけて悪いとは思ってる。」

「生きてるんだったら連絡ぐらいよこしやがれ！」

バシッ！

左手のビンタを甘んじて受け入れる。事情があつたとはいえ、母さんには辛い思いをさせたのは変えようのない事実だから。

「悪い……。」

「馬鹿野郎……。」

「・・・すまん。」

抱きついてくる母さんは俺の胸に顔を押し付けて声を殺して震えている。俺は母さんの髪を梳いて落ち着かせながら、視線を前に向ける。

「久遠君、君は・・・。」

「久しぶり、おじさん。聞きたいことは色々あるだろうけど、先に言わせてもらえば『里見久遠』はあの日に死んだ、それだけ是不一样的事実だよ。」

「どういう、意味だよ？それ？」

母さんが顔を上げる。というか、その顔と仕草を他の男にやらないほうがいいぞ？大抵の男はおとせると断言できる。

「今の俺は半妖の銀牙久遠<sup>ぎんがくおん</sup>。あなたたち、守人ならどういうことが分かるよな？」

「・・・やっぱりか。」

「やっぱり？何か知ってたのか！？刃！蘭！テメエばう」

「落ち着け。おじさん達にも話せない理由があったんだ。」

おじさんの反応に振り返り、今にも飛び掛りそうな母さんを無理矢理また胸に押し付けて黙らせる。

「・・・理由があつたにせよに隠し事をしていたことには変わりません。ごめんなさい。何も分からずに子を失つて苦しんでいたあなたに私は・・・。」

「そうかもしれないけど、それでも出来る範囲で母さんを支えてくれていたのもまた事実じゃないですか？ありがとうございます。母さんを支えてくれて。」

誰かが支えてくれなければ意外に脆い母さんは追い詰められていたかもしれない。そう思うと封印破りに一枚噛んでいる俺にはおじさん達に感謝はすれども恨む気持ちなど一切わいてこない。

「でも、久遠君。私は、私達はあなたの運命を大きく狂わせてしまった。私達がもっと注意を払っていればあんなことには。」

「あれはどうしようもない事故だったんです。IFの話をどれだけ繰り返しても、現実は何つもの偶然の重なりで容易く変化してしまう。どんな仮定の話をしたところで実をなさない無意味なことですし、変えられない過去より変えられる未来と今のことを考えましょう。・・・母さんもその辺わかってくれよ？」

押さえていた力を緩めると、母さんが体を離して蘭さん達に向き直る。

「・・・さっきは動揺してて、その、怒鳴って悪かった。お前たちが悪い奴じゃねえのは知ってるし、久遠の言うとおり何か理由があるだろうから許す。」

罰が悪そうでぶっくらばうに言い捨てる。蘭さん達は許されて安堵したようだ。

「にしてもよ。お前、蘭にだけ態度違わねえか？」

「そりゃ、蘭さんだからな。母さんももう少し落ち着いてくれれば敬意を払ってもいいぞ？」

何か蘭さんには頭が上がらないっていうか、自然とこっぴどい口調になっちゃおう。惚れた弱みというやつだろうか？

「おじさん、これから母さんには俺が知る全部を話す。いいよな？」

「それは・・・、」

「ここまできて話さないってのはないだろ？さっき、半妖つつう単語も口走ったし、母さんには聞く権利がある。今後の俺との付き合い方も含めて知らなきゃいけないことだ。・・・もしも、裏側に引きずり込まれることを心配してるんなら俺が母さんを護る。それが出来る力も手に入れた。」

例え、拒絶されようと俺は里見久遠が大切に思っていたものを、銀牙久遠としてあらゆる手段をもって守り抜く。

それは『俺』が『僕』であったことへの未練でもあり、『僕』が『俺』に変わるために決めた唯一絶対の誓い。

「一応、言っておくだけ言っただけだ。あなたが拒否しようとも俺の意志は変わらない。」

「・・・好きにするといい。それに・・・、僕もこれ以上舞華さんを欺き続けて、重荷を背負うのもゴメンだからね。」

おじさんはほつとしたような表情でそう言った。おじさんも蘭さんと同じで母さんに真実を伝えられずにいたせいで良心の呵責に苦しんでいたのだろう。

「よく言った。」

「え？つて、ぎゃああああ！！？」

何時の間にか母さんがおじさんの前にまで移動して、頭を鷲づかみにした。

・・・母さん、昔から握力が半端じゃなかったんだよな。笑いながらりんごを片手で握りつぶしてたし、お仕置きのアイアンクローは洒落にならなかった・・・。

「お前の知ってることは洗いざらい全部喋ってもらうからな」

「あぎゃああああ！！！」

・・・合掌。

引きずられていくおじさんの頭からやばい音が聞こえたような気がしたが・・・、きつと、気のせいだろう。

「私達も行きましょうか？」

「夫があれなのにほつといていいんですか？」

「あら？昔からよくあったことじゃない？」

・・・ああ、昔から無駄に誰かが母さんの餌食になっていた気が。  
俺とか、おじさんとか、悪ガキとか、俺とか、おじさんとか、俺と  
か、おじさんとか、俺とか、俺とか、悠璃と見せかけて何故か俺と  
か・・・。

「・・・行きましょうか。」

おじさんの悲鳴がどこかむなしく聞こえた。

## 第二話 現在 Side Kuon（後書き）

主人公の故郷への帰郷、親との再会を今回は書いてみましたが、この後の親たちへの事情説明は飛ばしていきます。

この後、律達との再会のとくに同様の話をするので重複するのを防ぐためというのと、早く二人を合流させたいという作者の勝手な都合になります。ご了承ください。

今回も駄文をご覧頂きありがとうございました。

## 第三話

## 出会い

## Side Ayaka (前書き)

一気に学園です。

### 第三話 出会い Side Ayaka

世界なんて欺瞞に満ち溢れている。あなたにはどんな風にこの世界が映りますか・・・？

Side Ayaka

入学して一月近く経ち、やっと身の回りも落ち着いて今日は学園の敷地内を歩くことにしました。

本当なら律さんと悠璃さんと一緒に出掛けたかったのですが、二人とも用事があるらしく私一人で出歩いています。

こうして学園内を実際に歩いてみると改めてこの学園の広さが身に染みます。整備された道や丁寧に世話をされているのであろう。街路樹など一般の規格では考えられないほどの充実した環境がここにはあります。

これほどの環境を用意したのも全ては魔法という常識外の事柄を密かに教えるため……。

この環境に入って私は何処かでホツとしていました。

『お、綺麗な人だな。一人かな？』

突然聞こえてきた声に驚くこともなく周りを見ると、こちらを见ている男の人がいました。

気が緩んでしまったせいでどうやら『聞いて』しまったようです。

私は生まれもって人の心の声を聞いてしまう力を持っていました。

幼い私はそれが何なのかも分からずに『聞いた』ことを普通のことだと認識して生活していました。当然、周りはそんな私を気味悪がり遠ざけるようになりました。

お父様やお母様にこの力のことは言うてはいけないと言われ、幼い私はその理由も分かりませんでした。が、お父様たちの顔が真剣だったので頷いて力を隠していました。しかし、そこは幼い子供、演技など出来るはずもなく些細なことからすぐにばれてしまいました。それから周りの友達だった人達は私を気味悪がり、いじめられました。

でも、いじめ以上に辛かったのは、私を慰めようとする人達でした。そういった人達は言葉ではどんなに取り繕っても心の中で私のこと

を罵倒し、忌避しながら仕方なくやお父様たちの心象をよくしようという下心を持って接してきました。

私はそんな人達が一番恐ろしく、人間はこんな人ばかりなのかと一時期、人間不信に陥り不登校になったこともあります。

そんな私にも転機が訪れました。

自分の持つ異常性に気づき、周りにそれを隠しながら力との折り合いをつけて暮らしていた中学三年生の冬のことでした。ある日、私が受験に向けて勉強していると、学園の人がじきじきに私の元へ訪れました。

私はすでに学園の受験を終えて、他の学校の試験に向けての勉強中でしたが突然、合格を言い渡されました。そのときに学園の本当の姿を教えてもらい、私の力のことも知りました。

精神感応テレパスと呼ばれているらしいこの力は稀に生まれながらに持った子が生まれるらしく、私以外にも同じような力を持った人がいると聞き、ホッとしました。私はどこかで自分が異端なのではないかと感じていましたが、それもそれを聞いて薄れていきました。

訪れた人物は本来の入学より早く学園に来て、力の制御の訓練をすることを勧め私はその話に二つ返事で答えて、次の日には家をあとにしていました。

それから短い期間で力の簡単な制御法を習い、一月ほど前に新入生としてこの学園での生活を始めました。しかし、気が緩むと自然と今のように『聞こえ』てきてしまうことがあります。

先日は律さんの様子がおかしかつたので、彼女と理由を知ってる様子の悠璃さんに力を使ってしまった。その中で、くーちゃん、という人の死の責任を律さんが感じているらしいということは分かりましたが、力のことを話していない私は彼女を慰めることも出来ませんでした。

彼女の秘密を一方的に知り、私の知りたいことは隠している。こんな私のことを二人が知ったら私を嫌うでしょうか・・・？

暗くなった思考を追い出し気を引き締めなおして、声を遮断するとその人から遠ざかるように歩く方向を変えました。

「ねえ、ちよつと。」

声をかけられましたが無視をして歩きます。

「ちよつと待つてよ。」

「・・・何でしょうか？」

追いつかれて肩を掴まれた私はこの学校に来る前に身についてしまった愛想笑いを顔に貼り付けて仕方なく応対しました。

「今、暇？」

「いえ、これから用事があるので。」

「でも、少しくらい時間あるよね？」

しつこい人のようです。肩を掴まれたときに振り切って逃げればよ

かったと思いました。

「ごめんなさい。少し急いでいますから。」

「少しぐらいいいだろ？」

「放してください。」

腕を掴んできたので多少強引に振り払いました。

「本当に申し訳ありませんが、私はこれで。」

「待てよっ。」

「放してください！」

「ちっ、うるせえな。少し遊んでくれるだけでいいって言ってんだろ！少しくらい美人だからって調子に乗ってんじゃねえよ！」

男は強引に私の腕を引っ張りました。周りに助けを求めようにも何時の間にか人気のないところを歩いていたらしく周りに人がいません。

「放して！」

「うるせえ！」

男が私の腕を掴んでる腕とは反対の腕を振り上げて、殴ろうとしたので私は目を閉じて痛みに備えました。しかし、いつまで経っても衝撃がきません。

「ぐう。」

男のうめき声がしたので、恐る恐る目を開けると男の隣に何時の間にか別の男の人が立っていました。

「大声がするから来てみれば、何だこの絵に描いたようなナンパの構図は？・・・いや、待てよ。この構図だと俺もベタなパターンに組み込まれてないか。」

新しく現れた男の人が前半は呆れたように、後半は顔をしかめて言いました。

「てめえ、誰だっ？」

「ただの通りすがり、というところあたりだから、あえて、打算たつぷりにその子を助けに来た通りすがりと名乗ってやる。」

「ふざけてんのか！」

「そうだが？」

「てめえ、ぶつころ！？あああああ！！？」

ナンパをしてきた男が挑発にのって私を放して、殴りかかろうとしたとき、突然叫び声をあげました。

「お前のことなんかどうでもいいが、俺と喧嘩をするというならまずこの腕が折れることになるがいいのか？」

男の人が最初に私を殴ろうとしていた腕を掴んでいて、そこを握りつぶしているらしく男が痛みへのたうちまわっています。

「わかった！わかったから放してくれ！」

それを聞いた男が手を放すと、ナンパをしてきた男は悪態をつきながら逃げていきました。

「月並みだが、怪我はないか？」

「はい。ありがとうございました。」

お礼を言つて私は初めてその男の人をちゃんと見ました。毛先から四分の一程度が銀色に染まった髪をうなじのあたりで一本に括つてあり、片方の目が紅い変わった感じの人でした。

「やっぱり珍しいか？これは？」

「あ、すいません。」

「いや、謝らなくてもいい。ここに来るまでに随分と奇異の視線にさらされたからもう慣れた。」

毛先をいじりながら苦笑する彼に私は自分が彼の容姿をジッと観察していたことに気づきすぐに謝った。

「それで、だ。助けたついでに一つ頼みたいんだが、いいか？」

「・・・本当に打算があつたんですね。」

「行動に何かしらの理由があるのは当然のことだろ？」

「冗談かと思ってました。」

「で、聞いてくれるか？」

「・・・内容にもよります。」

見た感じ悪い人ではなさそうだと助けられた恩もあるし、表層意識を軽く『聞いて』みたが悪意は無さそうだったのでそう答えた。

「道に迷った。案内をして欲しい。」

「・・・は？」

「聞こえなかったのか？」

「いえ、聞こえましたけど。」

少し予想外だったので間の抜けた声を出してしまった。

「この容姿だからな。人目を避けて道を歩いていたら何時の間にか迷ってた。」

「・・・。」

「今、まぬけ、とか思わなかったか？」

「いえ、そんなことはないですよ？」

ごめんなさい。正直、思いました。  
訝しげな視線を向ける男に愛想笑いで誤魔化す。

「・・・そんな作り物の笑顔だと、そうだと言ってるようなものだぞ？」

「え・・・？」

あつさりと見破られた？律さんと悠璃さんはもちろん、お父様やお母様すら欺けたこの笑顔を？少し前にあつたばかりの人に？

「どうかしたか？」

「あ、いえ・・・。その・・・、何で作り笑顔だと？」

男は当然と言わんばかりの顔で

「そんなの輝きが違うからに決まってるだろ？誰だって心底笑えば人を引きつける顔になるが、作った笑顔なんてもんは錆びた鉄と同じように輝きを感じない。ただそれだけだ。」

「・・・。」

当然のように言い切ったその言葉を私は呆然と聞いていた。

「で、俺の頼みを聞いてくれるのか？」

「あ、・・・はい。」ご案内します。」

「ん。ありがとう。」

そう言っ て微かに見せてくれた彼の小さな微笑みは確かに私を引き付けて、彼の言葉が私の心に染み渡っていき、そんなことを言った彼のことをもつと知りたくて、 気づけば

「お名前は？」

「銀牙久遠だ。 呼び方は久遠でいい。 お前は？」

「魅宗絢香です。」

「んじゃ、 絢香、 道案内頼む。」

「・・・はい。 久遠君。」

名前を聞いていて、 名前を呼ばれたことが嬉しくて、 自然体のあなたに惹かれて、 気づけば本当に久しぶりに心からの笑みを浮かべていました。

### 第三話 出会い Side Ayaka（後書き）

キャラの喋り方や性格、設定など物語の進行に伴いこうしたほうがいいなと思ったら、その都度変更していきますので、読んでくださる方には読みにくいとは思いますがよろしく願います。  
ご意見・ご感想・評価を頂けると幸いです。

#### 第四話 学園長と・・・？

Side Kuon (前書き)

夏休みに入りましたが、更新のペースは今までと変わらないと思います。

第四話 学園長と・・・？

Side Kuon

善も悪も関係ない。俺がすることはただ一つ・・・。そのためなら道化ビエロになって誰かに踊らせられることもいとわない。

Side Kuon

人目を避けて道に迷った俺が言うのも難だが、

「あんたも相当まぬけだよな。」

「い、言わないで下さい。」

顔を赤くして動揺する絢香は現地人であるし、道案内をあつさり受け入れてくれたもんだからすぐに目的地まで着くと思っていた。

「普通、自分も道が分かってないのに道案内引き受けるか？」

「し、仕方ないじゃないですか。そもそも街を見るために出歩いていたわけですし、少し考え事していたらあんなところにいてたんですから……。」

「で、そんなところにいるにも関わらず俺の頼みを引き受けて歩き出すまでそのことに気づかなかった、と。」

「うう。いいじゃないですか、こうして知ってる道に出たんですから。」

「そうだな。そのおかげでまた人目に晒されて、さっきから視線を感じるのもたいしたことじゃないな。」

「ううう……。」

俺が皮肉を言うと彼女は申し訳無さそうに顔を伏せる。それと同時に周りの視線がより一層強くなる。

あゝ、傍目から見て俺が彼女をいじめてるように見えるのか？ 控えめに見ても絢香が美人だから余計に俺が悪者扱いかよ……。

「まあ、とりあえずは目的地に辿り着けりゃいい。多少のことは気にすんな。」

「あ……。」

俺が絢香の頭を撫でると彼女の足が止まった。

「どうかしたか？」

「あの、その、あ、頭を……。」

「ん？」

頭？つてことは俺が撫でたことが原因で……っと、そうか。

「悪い。癖でついな。」

「あ……いえ。」

俺が手を離すとどこか名残惜しそうな声を出して再び歩き始める。

「癖、といういつもさつきみたいなことを？」

「まあな。子守をしてた時期があつてな。不機嫌になったときはたいてい頭を撫でてやると随分ご機嫌になるもんだからよくやってたら何時の間にか癖になっちまった。子守が終わってから直そうと思っただが、どうも周りは直してほしくないらしくてな。結局、そのまま放置したんだ。」

「子守ですか？」

「ああ。色々やってたんだよ。」

それこそしょうもない手伝いから殺し、殲滅任務、暗殺。手広くやっただけ。そのせいで無駄な技能、役に立つ技能、殺しの技能、色々と身についちまった。

「久遠さん？」

「ん・・・、悪い。」

辛気臭い考えはするもんじゃないな。すぐに表に出ちまう。

「まあ、色々やってたんだが、一段落したからやりたいことをやる  
うと思つてな。」

「やりたいことというのは、これから行く先に関係あるんですか？」

「大有りだ。学生やるんだつたら最高責任者に話をつけないとな。」

それに学園の理事長がどれだけの実力か直に確かめたいしな。

~~~~~

「・・・一言言わせてもらっていいか？」

「何だ？」

目の前に肘を机に立てて手の上に顎を乗せて座っている女がこの学園の理事長であるらしいのだが、用件を後回しにしても言わせてもらいたいことが一つ。

「ここは学園長室だよな？」

「部屋の前にかけられたプレートを見なかったのか？」

「じゃあ、この趣味全開の部屋は何だ！？」

ファンシーな壁紙に部屋中に置かれた部屋の半分以上を埋め尽くすぬいぐるみの数々、天蓋尽きのベッド、唯一浮いているのが机のみで今、彼女が座っている椅子さえも何かのキャラクターをかたどっているらしいふざけた椅子で、本人自身も真っ黒なゴスロリに身を包んでいる。

「趣味だが？」

「くっ……。上層部の思考がぶっこんでるのはあっちでもこっちでも一緒ってわけか。」

何を当然のことを、という感じで心底不思議そうに尋ねてくる女に俺はまともな人間を期待していた数分前の自分が情けなくなった。

「ああいう人ですから諦めてください。」

絢香も何処か達観したかのような声で俺に話しかけてきた。

「ん？絢香はあいつと知り合いなのか？」

「魅宗は私が直接迎えに行ったからな。それからも諸事情で一般生徒よりは親しい仲だ。」

俺が絢香に尋ねたのだが、何故か女が答えた。

「そんなことより見ず知らずの人間が私に何の用だ？」

「簡単に言えば、編入させて欲しい。それも一年に。」

女に言われて、用件を思い出した俺はその旨を伝えたと女は怪訝そうにただでさえつりあがっている眼を更に吊り上げた。

「こんな中途半端な時期にか？私は構わないが、ここに入るにはそれなりの資格が必要だぞ？試験の結果に納得しかなかったというならお引取り願うが？」

「試験は受けられなかったただけだ。それに俺はそちら側にどっぷりと浸かってる身だ。」

「ほう？」

「自己紹介をしてなかったな。俺は警邏『黒組』が『歩』、銀河久遠だ。」

俺の紹介と同時に女から威圧感が生じる。

・・・腐っても最高責任者か。

女が絢香に目を一度向けた後、再び俺に先程より厳しい視線を向ける。

「最下級の『歩』といえ、『黒組』の人間、いや、妖魔がどういう見だ？」

「別に特に意図はない。俺の個人的な事情で頼んでいるに過ぎない。」

俺が答えると同時に僅かな違和感を覚える。

「……『^{テレパス}精神感応』か。なるほど、それで理事長と個人的に知り合いなのか。」

俺が視線を隣の絢香に向けながらそう言うとき彼女は怯えるように震える。

『^{テレパス}精神感応』の力を持つ人間はそうじて精神的に脆い人間が多い。その力の特性ゆえに人の汚い面を否応なしに見てしまうため、その人間には早急なケアが必要になる。

「あまり驚いていないようだな？」

「知り合いに心を読む奴が何人かいるからな。しかも、そのうちの一人が上司な上にイタズラ好きで日々読まれてた身としてはただの『^{テレパス}精神感応』ごときで一々騒ぐことでもない。」

何も心の全てを簡単に読めるわけではない。無防備な人間でも訓練して深く読もうとしなければ深いところまで読むことは出来ないし、訓練したとしても対処法を知っていれば相当力が強くない限り心を読まれることはない。

今の感じだと表層意識を読む程度くらいのもんだろう。毎日のよう

に深層心理まで読まれていた身としては痛くも痒くもない。

「それに驚く云々で言うなら『精神感応』^{テレパス}より妖魔のほうが驚くだろ？」

「それもそうだな。」

「つつうことだから、あんたが俺を避けるようなことはあっても俺があんたに嫌悪感を覚えるようなことはないから安心しな。」

「さ、避けるなんてそんなことしないですよっ！」

突然叫んだ絢香に目を丸くする女と俺に気づき、彼女は叫んだことを恥ずかしがるように顔を背けた。

「くつくつく、そうかそうか。中々いい傾向だな。」

「何がだ？」

「いや、何でもない。こっちの話だ。」

女が愉快そうに笑うと先程より若干警戒心を下げて俺に視線を向ける。

「それで、個人的な事情ということだが？」

「本当に個人的なことだ。あちら側の連中は一切関係ない。というか、基本的にあいつらが他に関わるようなことはないのはあんたも知ってるだろ？・・・そちら側に迷惑をかけるつもりはない。もし、こちら側の関係で問題が起こったとしても俺が鎮圧する。」

「しかし、妖魔を入れるとなると他の教師陣から反対意見が出るぞ？」

「それも問題ない。俺は半妖だ。学園は半妖も受け入れているという話を聞いているが？」

「え？そうなんですか？」

「・・・さらつと学園の秘匿情報を言わないで欲しい。確かに半妖を受け入れているが、その事実を知っているのは一部に過ぎない。迂闊な発現は謹んで欲しいな。」

「あちら側では有名な話なんだがな。」

自分の手元に子供を置けない妖怪が自分の子供がどうしているのか気になって何度かこっそり見に行つて、帰ってきてその話を周りの親しい仲間に話すということがよくあり、半妖を学園が受け入れているというのはほとんどの妖怪が知っている。

「ついでに言えば、あつちでは実戦ばかりだったからこちらで少しはまともに勉強したいというのもある。」

俺が戻るために仕事をしたいと言つた直後からすぐに実戦投入されたから俺の力は我流であり荒い部分が多々あるのも事実だ。

「それで？受け入れてくれるか？」

「・・・『歩』とはいえ、実戦経験者、それも『黒組』のものがいるなら周りにもいい刺激になるか。」

「じゃあ！」

何故か絢香が嬉しそうにする。

「編入を受け入れよう。．．．ああ、ついでに絢香のクラスにでも入れるか。」

「助かる。」

「いや、こっちもこっちで考えがあるから気にするな。な、絢香。」

「ひよえ！？」

俺が気を遣ってくれたのだろう女に礼を言うと、女が絢香に話を振り、何故か奇声を発して顔を赤くするのを不思議に思いながら見ていると

「そつえば君は何の半妖なんだ？」

「ん？ああ、俺はこれだ。」

魔の気配を操作して分かりやすいようにそれを露出する。

「．．．．。」

「どうかしたか？」

俺を見て硬直する二人。

何かおかしかったか？あつちでは意外と好評だったんだがな、この俺の耳と尻尾。やっぱり人間の価値観と妖怪の価値観ではズレがあるのか？

「それ、は・・・？」

女が震える声で聞いてくる。

声が震えるほど似合っていないか？

「耳と尻尾だが？狼のだから、犬の耳と尻尾に見えるだろ？」

顔を伏せた女の全身が震え、そんなにまずかったかと思い耳と尻尾をしまおうとしたとき女が顔を上げて

「イ・ヌ・ミ・ミ~~~~！！」

「はあ！？つて、おいっ！！」

いきなり叫び声をあげて飛び掛ってきた女を一応は受け止めると

「ついに！ついに夢にまでみたイヌミミが私の目の前に！！しかも尻尾付き！！ああ！！やっぱり本物は手触りが違う！！」

女は無遠慮に俺の耳と尻尾を存分に触りまくり堪能する。俺は絢香に助けを求める。

「え、えつと、莉里^{りり}さんは無類のイヌミミ好きみたいで、その、今までも本物のイヌミミを探してたみたいなんですけど、今まで会う機会に恵まれなかったらしくて。」

「はぁ〜〜。」

「・・・で、目の前に現れた本物を存分に堪能していると。」

よく見れば部屋のぬいぐるみも犬系が多いような気がする。

ため息をついて尻尾に頬ずりしてうつとりしている女を引き剥がす。

「いい加減にしろ。」

「もう少し！もう少しだけ！」

「お前は子供か！」

俺が怒鳴ると、ピタッと動きが止まる。

「そんなこと言っているのか？私の一声でお前をここから追い出すことも出来るんだぞ？」

真面目な顔をしてしようもないことをするなっ！と、怒鳴りたかったが何とか堪えた。

「はぁ・・・、好きにしろ。」

「そうそう。それでいい。はふう。」

元々、あつちでも弄られていたからそれ自体に抵抗があるわけではないからな。

「お前も触るか？」

「え！あ、いや！えっと……。い、いいですか？」

さつきから触りたそうだった絢香に言うと、恥ずかしそうに確認してきた。

「一人増えたところで変わらない。」

「で、では、失礼します。」

絢香の手が耳に触れる。

「あ、柔らかい……。」「

絢香も耳を遠慮なく揉んで堪能していると、

「はふう。……。そうだ。君、私のところに住め。ふにゅっ。」

「は？」「

「ああ、柔らかい……。家に帰ればイヌミミが待っている。何ていう贅沢だ……。はあ……。」「

「ちょっと待て！確かに住むところはないが、そんなくだらない理由で俺の住居を決められるのか！？」

「ああ……。ちなみに君に拒否権があると思うな。この手触りがたまらない……。」「

「ぐっ……。分かった。だが、その前にあんたの名前は？同居人の名前くらい先に聞いておきたい。」

「ふあ……。亜神莉里だ。ふにゆう……。」

その後、三十分に渡り俺の耳と尻尾を堪能された……。

そういえば、絢香もイヌミミ好きなのか……？

先行きがここに来る前と別の意味で不安になってきた。

第五話

恋愛事情

Side Ritu (前書き)

夏休みの間、更新をせずにいてしまい申し訳ありませんでした。本編のほうも執筆の期間を空けてしまったことで質が落ちているかもしれません、どうかご容赦下さい。

第五話

恋愛事情

S i d e R i t u

償うことが無意味なら、苦しむことしか出来ない。なら、苦しむことが与えられた罰なのだろうか・・・？

S I D E R i t u

一昨日、絢香が帰ってきてから妙に機嫌がいい。

何かあったのかと聞いても何でもないと言えながら頬を緩ませる状態で何かがあったとは思えない。

それ以外にも時折鼻歌を歌ったり、ぼーっと何もないところを眺めていたりして明らかに様子がおかしい。

「ずばりっ！恋だねっ。」

「恋？」

「うんうん。りっちゃんがそういうのに疎いのは相変わらずだねっ。悠ちゃんはそんなりっちゃんの将来が心配ですっ。もしものときは悠ちゃんがお婿にもらったげますよっ？」

笑顔でありがたいお言葉をくれた悠に同じく笑顔で拳骨をくれてやった。

「ぐにゅ。ひどいなあっ。」

「人を男扱いするほうが悪い。で、実際どうなの？」

「・・・え？何の話ですか？」

学園に向かう最中に一緒にいる悠に絢香のことを相談したのだけど、当の本人はどうやら聞いていなかったらしい。

「一昨日何処かに行った絢香が恋をしてるって話。」

「こ、恋ですか！？いいえ！そんなことないですよ！？」

「そんなに顔を真っ赤にしたら説得力なんてないと思いますよ？」

「あ、あうう。こ、恋だなんて、その、私は、そういうことではなくて、ただ、そのですね、えっと、感謝というか、なんというか・・。」

顔を赤くして俯いて恥ずかしげに視線を彷徨わせる絢香を見て悠は更に笑みを深くして絢香に近づく。

「絢香ちゃんが恋。悠ちゃん、びっくりですよ。」

「だ、だから、そういうのではなくて。」

「絢香ちゃんぐらいの美人さんだったら告白すれば男の子はすぐに落ちると思うよ。」

「えうつ。あの、その、り、律さん。」

「悠、いい加減にしろ。」

絢香が本気で困っているようなので悠の首根っこを捕まえて引き離す。

「ぶう。いいじゃん、いいじゃん。面白い話なんだし、りっちゃんに興味ないの？」

「興味があるかないかで言えばあるけど、」

「じゃあ、もっと根掘り葉掘り聞き出して絢香ちゃんの恋の応援を

しよつよつ。」

「馬鹿言っんじゃない。」

「みぎやつ。」

目を輝かせた悠の頭に再び拳骨を落とす。

「興味はあるけど、無遠慮に聞きだす気もないよ。悠だってそうだった時に同じようにされたら嫌でしょ？」

「むう……。だって、だって、だってさあ。りっちゃんだとそういう話全然ないんだもんつ。中学のときだって、ファンクラブとかあったのに、あったのはレズ疑惑だけなんだもんつ。悠ちゃんだってそういうお話をお友達としたいんだよつ。」

「ちょっと待って！ファンクラブも初耳だけど、レズ疑惑って聞き捨てならないんだけど！」

「全生徒周知のことだよ？ちなみに、正妻は悠ちゃんだよつ。」

「全生徒にそんな根も葉もない噂がつ！？しかも、正妻ってことは他にもいるの！？悠も嬉しそうに言わない！！」

何でそんな噂が流れたんだろう？今、思い返せば確かに妙に熱っぽい目で見ていた女生徒が多かったような……。というか、後輩に至ってはそういう子しかいなかったような気がする。いやいや、そんなことはないはず。

仲がよかったあの子は勉強でよく分からないところを教えてくれたし……。必要以上に体が近かった上に息が荒かったような気もす

るけど。そ、それに剣道部の先輩や後輩と一緒に熱心に部活に取り組んでいたし、・・・よく体を密着させて型の稽古をしていたり、ボクが汗を拭いたタオルの取り合いをしていたりしたけど。く、クラスの人達とも仲がよかったし、・・・体育のときとか着替えをするときに妙に視線を感じたり、唾を飲む音が聞こえたけど。し、知らない生徒でも挨拶をすれば笑顔で返してくれたし、・・・たまに恍惚としていたりしたけど。

・・・そ、そういえばバレンタインのときに何故か大量に義理チョコをもらっていたなあ。

「な、何でボクが？自分で言うのもあれだけど、結構男勝りな性格してるし、可愛くないと思うんだけど？」

「りっちゃんは自分を卑下しすぎだよ。りっちゃんって姉御肌なのに初々しいところもあるし、容姿も悪くないからね。年上からも年下からも大人気だったんだよ。知らぬは当人ばかりの高嶺の花ってね。悠ちゃんもりっちゃんのこと大好きだよ。もちろん友達としてだけだよ。」

「あ、ありがと。」

正面からこうやって好意を向けられると流石に気恥ずかしくて視線を逸らす。

「そういうところが初々しくていいんだよね。ねっ、絢香ちゃん？」

「はい。可愛いと思いますよ。」

絢香にまで言われて顔が火照るのを感じる。それを誤魔化すように

慌てて

「そ、そういう悠だって恋の話はないじゃないか？」

お返しのように聞き返したのだが、ボクはすぐに後悔した。

「うん。だって、悠ちゃんの初恋はまだ終わってないからねっ。」

さっきまでと同じように明るい笑顔、しかし、何処か寂しさも見え隠れするのが分かってしまった。

「そうなんですか？」

「うん。ずっと、ずっと、遠いところに行っちゃったけどそれでも悠ちゃんはまだ忘れられないんだっ。きっと忘れられるまで新しい恋は出来ないだろうし、悠ちゃんは忘れたくないからこれから先、恋は出来ないだろうししたくもないかなっ。」

悠はくーちゃんのことが好きだった。

何時か同じ歳の兄妹ということに疑問を覚えて、おばさんに尋ねたことがあった。

悠は本当はおばさんの子ではなく、おばさんの夫の兄夫婦の子ということだった。なかなか子供が出来なくてやっと間にもうけたのが悠だったのだが、悠がまだ親の顔を覚えるより前に不慮の事故で偶然一緒にいたおばさんの夫と共に二人とも亡くなってしまったらしい。

それからおばさんは悠を引き取り、兄妹として育ててきたが悠はく

「ちゃんを兄としてではなく何時しか一人の男の子として見るようになっていた。

当時はまだそれが恋とは分かっていなかったようだけど、心が成長するにつれてそれが恋だと自覚したらしい。だけど・・・、そのときにはもう、彼はいなかった・・・。

「・・・。」

ボクは悠の友達でいていいのだろうか？ボクは悠から兄と想い人を同時に奪った。悠はそれを許してくれているけど、ボクはその好意に甘えていていいのだろうか？

改めて突きつけられた罪に心を押し潰されそうになりながらそのまま足を進めた。

その悩みがその日のうちに解決するとは露とも知らずに・・・。

第五話

恋愛事情

Side Ritu (後書き)

休み明けの第一作ということになりましたが、物語の展開事態はあまり進まない結果に終わり申し訳ありません。次回の話で久遠と三人を合流させたいと思います。再開のシーンをうまく書ける自信はありませんが、読者の皆様方に少しでも満足していただけるように努力いたしますのでよろしくお願いいたします。

第六話

再会

S i d e K u o n

まず驚いて、次が安堵、その次に懐かしさ、微かな不安と後悔、それと近くに來たのに更に遠くに感じたな。・・・お前の隣に帰ってくるために血にまみれた俺と案の定、過去の俺に囚われてるお前、一体どちらが俺たちを遠ざけたんだろうか？

S i d e K u o n

まずは担任に会わせるということで一昨日に訪れた莉里の悪趣味な学園長室に來るように言われて來たのだが、

「・・・逢引？」

「この状況を見て現実を拒否したくなる気持ちは分かるが、とりあえずそうじゃない。」

來るときから少し呼び出された時間が早いから予想はしていたが、

かれこれ一時間近く俺の耳と尻尾を俺の膝の上でご堪能されるとは・
・。

俺がふざけた椅子に座りその膝の上に向かい合うように座りながら
莉里が俺を弄ってる光景を見て入室して数分停止した後、口を開い
た女性にとりあえず否定の言葉を返す。

「って、が、学園長！？何をしていらっしやるんですか！？」

「ふにゅ。」

女性が慌てて叫ぶも本人は尻尾を撫でて恍惚としている。

ため息をつきながら莉里の首根っこを掴み片手で放り投げると、彼
女は何の苦もなく宙返りをしてスカートの裾を押さえながら綺麗に
着地する。

「いきなり酷いじゃないか。」

「それくらいで怪我をするたまでもないだろ？それと、待ち人が着
たぞ。」

事実、昨日はもつと荒く振り払ってもケロッとしていたしな。

耳と尻尾をしまいながら立ち上がり、入り口の近くに立っている女
性を指差す。

「チツ……。早かったじゃないか、紗羅^{シラ}。」

「舌打ちっ！？え、ええ。と言っても、言われた時間の五分前です

が。」

「む？もうそんな時間か。・・・気を利かせればいいものを気の利かない奴だ。」

「理不尽な罵倒！？あ、あなたが呼び出したんじゃないですか！」

「気にするな、本気だから。」

「冗談じゃないんですか！？」

・・・苦勞人か。何処か親近感を感じるな。

紫がかった髪は短めで中性的な容姿にスーツをキツチリと着こなしていることからキャリアウーマンっぽい印象だったのだが、今のやりとりで若干イメージが崩れ、楽しそうに女性をおちよくる莉里とそれに一々反応を返す女性を見て、俺とあのクソ上司が重なり女性の気苦勞が想像できて苦勞をかけないようにするかと思った。

「で、紹介はしてくれないのか？」

「彼女は芒紗羅^{すされい}。私の有能な右腕だ。」

「有能な右腕という名の雑用処理、主にあんたの世話係じゃないだろうな？」

「で、こつちが銀牙久遠。今日からお前のクラスに入れる。」

見事にスルーしやがった。

「私のクラスに、ですか？半妖の方のようですから、それなら私じやなく氷雨先生のクラスに入れたほうがよろしいのでは？」

「私はどっちでもいいんだが、絢香がこいつを気に入ったようだな。」

「魅宗さんですか？」

「そうなのか？」

気に入られるような行動をとった覚えもないので俺も莉里に問いかける。

「くつくつく、まあ、そういうことだ。」

「そういうことでしたらお引き受けします。」

紗羅が俺に向き直る

「改めまして、芒紗羅です。あなたのクラス、1 - Fの担任で理論を主に教えています。」

「銀牙久遠だ。敬語が必要なら口調は改めるが、どうすればいい？」

「あなたの話しやすいようにしてください。呼び方も好きなようにどうぞ。」

「そうか。で、どこまで知ってる？」

「どこまで？」

やはり、というか何も知らせてなかったのか。こいつといいあのクソ上司といい部下にしっかりと情報をよこせ。

「莉里。」

「安心しろ。紗羅は話の分かるやつだ。」

ため息をついて、紗羅を見据える。

「改めて、警邏『黒組』が『歩』、銀牙久遠だ。」

名乗ったと同時に紗羅の眼が鋭くなる。

「警邏……。確か、『裏平安京』の戦闘機構、『黒組』は執行部隊でしたか。」

「昇進したばかりだな。」

いつでも動けるように体を整えながら紗羅と睨みあう。

しばらく睨みあうと突然、紗羅が力を抜く。

「学園長が信用しているようですし、悪い人ではないみたいですな。」

「どうかな？俺は自分が悪人だとは思わないが、善人だとも思っていないぞ？」

言いながら俺も力を抜く。

「そのときはそのときです。」

「そうか。」

極自然な動作で紗羅が右手の人差し指を僅かに動かすと、俺は苦笑しながら右手を顔の前にまで持ち上げて、いきなり飛ばされた炎を握りつぶす。

「じゃあ、これは何のつもりだ？」

握りつぶした炎のせいで煙が指の間から漏れるが、特に気にもせず
にそれを放った紗羅に問いかける。

「いえ、どれほどの実力なのかと思ひまして。」

「殺気もなしに放つわりには少し威力が強いんじゃないか？」

「防ぐと思ひましたから。握りつぶすとは思ひませんでしたか。」

「打たれ強い体質なものでな。」

右手を広げて掌を相手に見せる。

「・・・高速再生^{リバース}、ですか。」

「それと似たようなものだ。持ち前の丈夫さと合わさってそれなりに耐久力はある。」

僅かにあつた火傷もすぐに塞がり、すでに何の問題もない。

「しかし、ライカンスロイプヒューレント・クオリティ
イレギコラー・クオリティ人狼の固有特性にそのような特性はなかったはずですが？ 特異特性ですか？」

「その辺は色々事情があるんだ。それに俺はライカンスロップ人狼とは何の縁もない。」

「縁がない？」

紗羅が訝しげに俺を見るが、必要ないことをこれ以上喋るつもりはないので沈黙を保つ。莉里にも視線を向けたが、そもそも彼女にも話してないので知っているはずがない。

「そんなに気にしなくてもそいつが何であろうと問題はない。ライカンスロップ人狼だろうと新種だろうとそいつはそいつだ。どうしても気になると言うなら調べるか、本人が話すのを待てばいい。」

「・・・そうですね。」

とりあえずこの場での追求は止めることにしたらしい。

「それでは時間も時間ですし、そろそろ行きましようか。」

「そうだな。」

「ま、適当に頑張つて来い。」

莉里に送り出されて俺たちは部屋を後にした。

~~~~~

「では、呼んだら入ってきてください。」

「ああ。」

紗羅が先に教室に入っていくと、騒いでいた室内が途端に静かになっ  
ていく。

それから紗羅が何点か連絡事項をした後に

「それと今日から編入生がこのクラスに加わります。一身上の都合  
で入学が遅れましたが仲良くやってください。」

やはり編入生と聞くと若干クラスがどよめき始めた。何時の時代も  
編入生はいい話題になるらしい。

「それではどうぞ。」

促されてドアを開けて教室に入る。

多くの視線を感じながらもそれらを無視して、紗羅の隣に行くとチ  
ョークを渡されたので黒板に自分の名前を書き、生徒たちに振り返  
る。

「銀牙久遠だ。一身上の都合でこんな時期に編入という形になった

がよろしく頼む。」

軽く頭を下げると紗羅が拍手を始めて、そこから生徒にも伝播して迎え入れられた。

顔を上げてクラスを見渡すと、クラスの後ろのほうに絢香の姿を確認して目で挨拶をすると彼女も気づいたのか手を小さく振ってくれた。

と、同時にその隣にいる懐かしい面影を残す人物を見つけた。

何の因果か同じクラスらしい。探す手間が省けたのはよかったが少々気まずい。

「席は魅宗さんの隣です。分かりますか？」

「大丈夫だ。」

生徒たちの間を通り絢香の前にまで足を進めて足を止める。

「こんにちは。久遠さん。」

「ああ。これからよろしくな、絢香。」

笑顔で挨拶した絢香に返事を返すと、俺と彼女の関係を探るような周りのざわめきが聞こえた。

そして、視線をその隣に移すと目を大きく見開いて硬直している幼馴染の姿を確認して出来る限り穏やかな声で

「久しぶりだな、律。いや、りっちゃんのほうがいいか？」

その声に律は更に目を大きく見開くと震える声を搾り出した。

「くー、ちゃん？」

「ああ。・・・その、悪かった。色々あつて連絡がつけられなくてな。」

罰が悪くなり若干視線を逸らしていると、律の両目から一気に涙が溢れてきた。

「くーちゃん!!」

「つと。」

椅子を蹴り飛ばして抱きついてきた律を受け止めると、律は俺の背中に両手を回して力一杯抱きついて俺の胸に顔を埋める。

「いるん、だよな？ここに、ちゃんと、いるんだよね？」

涙声で俺の胸に顔を埋めたまま問いかけてきた。

「ああ。ただいま、律。」

優しく宥めながら声をかけると堰を切ったように泣き始める。

俺も律の背に手を回してあやしていると

「銀牙君？」

「悪い。もうちょっとこいつを泣かせてやってくれないか？こいつには色々重いものを背負わせちゃったからすっきりするまで好きなようにさせてやりたいんだ。」

紗羅が状況の説明を求めてきたが、とりあえずは心配させてしまった幼馴染を優先させてもらうように頼む。

「・・・わかりました。彼女とも知り合いのようなので席は彼女と魅宗さんの間にしますが、いいですか？」

その様子を見て俺と律が浅からぬ仲であることを悟った紗羅が絢香と俺に確認をとる。

「ええ。大丈夫です。」

「むしろ、そうしてくれると助かる。」

それから授業が始まっても律は泣いたままで、周囲から律との関係をあれやこれやと推測されて生暖かい視線で見られたり、嫉妬交じりの視線で見られたりして律が我に返ったときには顔を真っ赤にしていた。

昼休みになり、俺の姿を確認した悠がそれ以上にか、とんでもないくらい大泣きして周りからの視線が更に厳しくなったりしてあつという間に俺の顔と名前が女泣かしという不名誉な言葉とセツトで知れ渡ってしまった。

## 第六話

### 再会

### Side Kuon（後書き）

試行錯誤した結果、下手に多く表現しようとするとうまく書けなくなってしまう結局、肝心の再開のシーンがかなり短めになってしまいました。

自分の文章力の無さを改めて痛感しましたが、これからもこの作品を頑張って作成していきたいと思います。

## 第七話

### 妹の想い

S i d e   Y u u r i

何時からか君の背中に例えようも無い安堵感を覚えて、何時からか君の温もりをどうしようもなく求めて、何時からか君の幻影に何度も涙を流して、それがどうしようもない想いだと気づいたとき君がいないことがとても苦しくて、帰ってきた君を見て私はこの想いを止められなくなっちゃうと思った。

S i d e   Y u u r i

今までの人生を悲観するわけじゃないけど、今がどうしようもなく幸せだと思ってしまうのは仕方の無いことだと思ってしまう。

「・・・なあ。」

「な〜につ？」

ずっと、ずっと、私の願いは叶わないと思っていた。

ずっと、ずっと、会えないと思っていた。

ずっと、ずっと、何時からか抱いたこの想いを確かめることが出来ないと思っていた。

でも・・・、こうしてまた会えた。

「離れてくれないか？周りからの視線が痛い。」

「え〜！別にいいじゃんつ。ほらほらつ、周りに悠ちゃんとくお君のラブラブっぷりを見せつけよつ。」

その温もりを確かめるように、その存在を確かめるように私はくお君に抱きついてますつ。

「ラブラブって、兄妹だろうが。」

「血の繋がらない、ねっ♪。」

それを聞いたとき、私がどれだけ嬉しかったか、どれだけ悲しかったか、分かる？

私が自分の想いに気づいて、兄妹という壁に阻まれて受け入れることが出来なかった気持ちを受け入れていいのだと嬉しかった。

そして、その想いを永遠に届けることが出来なくて悲しかった。

「そつえば、そつらしいな。」

「ありやつ？何で知ってるのっ？」

「ここに来る前に母さんたちに会ってきた。そのときに色々聞いたんだ。俺のいない間のこととか俺と悠のこととか、お前たちがここにしていることをな。」

あ、そうなんだ。くお君の驚く顔を見たかったのになあ。

「ふゝん、他にお母さんたち何か言ってたっ？」

「そりゃあ、何年も連絡なしに姿をくらましてあの人が無言でいるわけないだろ？」

私はそういうことを聞いたんじゃないんだけどな。

お母さんは私が自分の想いに潰されないように色々と助けてくれたから何かそういうことをほのめかしてたかもしれないと思ったんだけど・・・、こういうことは自分で口で伝えたいからねっ。

「怒られたんだっ？」

「まあ、最初はそうだったんだが、酒が入ってくると泣き始めて、普段のあの人じゃ絶対言わないだろうつつつことを俺にしがみつきながら延々と言い始めて、蘭さんとおじさんもそれを煽るし・・・、正直、そっちのほうがかかり堪えた。」

「でも、くお君が悪いんだから自業自得だよ。」

私には見せようとしなかったけど、お母さんはくお君の命日になるいつもに比べて無理をしてる感じになってたからね。私にはどうすることも出来なくて歯がゆかった。

けど・・・、あのお母さんが人前で泣くななんて私が思っていたよりよっぽど辛かったんだろうな。

くお君もそれが分かっているのか困ったような、申し訳なさそうな感じになっている。

「しかも、次の日から俺が家を出るまで今の悠みたいにならずと引っ付いてきて困ったんだが、ああいう弱いところを見せられた後に無下に振り払うことも出来ないし、結局、ずっとそのままで蘭さんに新婚みたいですね、ってからかわれて、街の人から生暖かい視線をもらって、男共には嫉妬のこもった視線を浴びせられるはめになっちゃったんだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・お母さん？

お母さん、応援してくれるって言ったよねっ？叶わない思いだったけどそれでもお母さんは認めてくれたよねっ？

「流石に風呂は勘弁してもらったが、寝るときまで一緒に断ろうとすれば急にしおらしくなって捨てられた子犬みたいな目をするもんだから添い寝はしたんだが、寝ぼけて体を押し付けてきて理性が切れそうで危なかった。」

ふ、ふふふっ。そうかっ。そうなんだっ。お母さんも敵なんだっ？

敵なんだねっ？

まだ若いからいい人を捕まえて幸せになってほしいとは思ってたけど、くお君を狙うなら話は別だよっ？

というか、実の息子に手を出そうとするなんて何を考えてるんだろ  
うねっ？

くお君は知らないみたいだけど、お母さん寝付きが悪いから絶対に  
わざと体を押し付けてくお君を誘ってたよねっ？

「そついえば、母さんが弟か妹、出来るならどっちが欲しいんだ、  
って言ってたんだが、誰かそういう対象になりそうな相手でもいる  
のか？まだあれだけの容姿なら引く手数多だろう？」

「さあっ？悠ちゃんには分からないけど、そういう人がいるなら悠  
ちゃん達は応援してあげようねっ？」

「当たり前だ。今までの分も親孝行しないといけないからな。」

とりあえず、お母さんがいない今のうちにライバルを蹴落としなが  
らリードを広げておかないとねっ。

「で、だ。話は戻るが、いい加減に離れてくれないか？母さんもそ  
うだが、お前も自分の容姿くらいは把握してくれ。周りからの視線  
が嫉妬まみれだぞ？」

「お母さんはよくて悠ちゃんは駄目なのっ？」

「あれは短い期間で親子だからだ。今、ここで許せばお前はこれか

らずつと引つ付くだろ？それに、今はお互いに兄妹じゃないっていう認識があるんだ、なおさらまずいだろ？」

容姿を褒めてくれた上にちゃんと私を女として認識してくれてるのは嬉しいけど、なんか言葉の節々から天然の感じがするなあ。

「そうだよ。くーちゃんも困ってるしいい加減に離れたらどう？」

「そうですね。女性として少し慎みが足りないんじゃないですか？」

親友にして、ライバルであるりっちゃんと絢香ちゃんが頬を若干引きつらせながら私たちの会話に割って入ってきました。

りっちゃんは罪悪感のせいで自分では気づいてないみたいだけど、絶対にくお君のことを好きだろうし、絢香ちゃんは多分、一昨日の人がくお君で好きになりかけてるんだと思う。

一日で女の子を落とすなんてお母さんのことといい、くお君もしかしてすごい女たらしになっちゃってるっ？しかも、無自覚の？

確かに容姿も大分変わってカッコいいし、こうやって抱きついてると分かるけどかなり遅いし、一部が銀色になってる髪や片目だけ紅いのも似合ってたて凄くいい。

現にすれ違った女子のうち何人かはくお君に見惚れてたし・・・、油断しているとライバルがまた増えそうだねっ。

「えっつ。別にいいじゃんっ。ねえ、くお君は悠ちゃんが嫌い？」

「嫌いじゃないが、少し困る。」

「じゃあ、我慢してっ。」

「ちょっと悠！」

絢香ちゃんは何も言わないけれど、さっきより機嫌が悪くなっているような気がするなっ。

「りっちゃんが怖〜いつ。」

二人に見せ付けるようにくお君に抱きつく力を強くしてみました。

すると、くお君は肩をすくめて苦笑をすると抱きついているのと反対側の手を私の頭に乗せましたっ。

「まあ、何年も寂しい思いをさせたからな。今日ぐらいは多めに見てやるよ。」

そう言いながら優しく髪を梳いてくれて、あっ、ヤバッ。凄い気持ちいい。

何か、凄い手馴れてる感じ。無意識のうちにうっとりしていくのが自分でも分かっちゃう。・・・病み付きになりそう。

「あ・・・。」

その手が離れていくと名残惜しくてつい声を出しちゃった。

「妹分の我侬を聞くのも兄貴分の役目だしな。」

「……。」

変わって、ないなあ……。

『妹の願いを聞くのもお兄ちゃんの役目だから。』

昔も私が我侭を言って困らせたときはそう言っただけの願いを叶えるために頑張って可能な限り叶えてくれた。

言葉遣いや姿、雰囲気が変わってもそんな優しいところは変わっていない。

お母さんが女の子には優しくするように小さい頃からくお君に言い聞かせてたのも理由の一つだと思うけど、やっぱりその温かい優しさはくお君の生来の気質なんだと思う。

そんなくお君だから、私はこんなにも夢中になってしまふ。くお君の優しさという甘美な麻薬が私を絡みとって離さない。

「くお君。」

「ん？どうした？」

だから、もう置いてかないで。くお君の行くところなら何処にでも着いていくから。選んでくれたら嬉しいけれど、選んでくれなくても私を連れて行って。

私が何も言わずにくお君を見つめると彼は今度は少し乱暴に私の頭を撫で回す。

「そんなに急いで答えを出すもんじゃない。まだ若いんだからもつとゆっくり考えろ。・・・少なくともそれまではお前の前から姿を消すような真似はしないから安心しろ。」

「でも・・・、」

「でも何も無い。急いで答えを出せば何かを見失う。急ぐ必要のないお前はゆっくり考えて自分にとって最善の道を選べ。・・・お前まで道を踏み外す必要はないんだ。」

その言葉にはどこか懇願のような切なる思いが宿っている気がした。くお君は急いで何かを見失ってしまったのかな？それで後悔、ううん、何かを諦めてしまったんだ。

私にその道を歩んで欲しくないからこんなことを言うんだと思う。けど、じっくり考えた先でなおその道を進もうとするならくお君は応援してくれるはず。

私のことを大事に思ってくれるのがたまらなく嬉しい。今すぐこの嬉しさをくお君に伝えたいけれど。

「・・・うん。そうしてみる。」

それを伝えるのは答えが出たときにしようと思う。

この心の内に秘めた想いと一緒に・・・いつか、くお君の傍で寄り添っていけるように。

けどね、どんな答えが出てもお君を想う気持ちはず~~~~っと、  
変わらないってそれだけは自信を持って言えるからねっ。

## 第七話

### 妹の想い

S i d e Y u r i (後書き)

せっかく魔法的な要素があるのにあまり出せていないことに少し悩んでいます。自分の構想でこのままいくとその本格的な出番が随分先になると気づき、どうしようかと思っています。試行錯誤を繰り返してみますが、それが読者の皆様に満足していただければ幸いです。

## 第八話

『里見』と『銀牙』

Side Ayaka（前書き）

説明的な話が続きます。

## 第八話

『里見』と『銀牙』

S i d e   A y a k a

貴方の歩んできた道はどれほど辛かったのでしょうか。貴方の心はほの暗い灰色の世界ようで晴らすことも出来そうにないその世界にどれほどの想いがあるのですか・・・？

S i d e

A y a k a

誰にも邪魔されそうにないところで話したいということで私達の部屋に久遠君を招くことにしました。

学校の中だと律さんと悠璃さんを泣かしたせいで目立ってしまい落ち着ける場所がなく、学外の場所で話しをしてまた目立つのを避けるためにここになりました。

「まず最初に言っておくが、俺は『銀牙』久遠であり、『里見』久遠じゃない。」

久遠君が悠璃さんを抱き着かせたまま座って話の最初にそう言いま

した。

私達がその発言の意味をよく理解が出来ず、それが久遠君にも伝わったようです。

「『里見』久遠は間違いなくあの日に死んだってことだ。」

その言葉に律さんが顔を俯けてました。

「でも、くお君はちゃんとここにいるよっ？」

「ああ。まあ、『里見』と『銀牙』を分けてるのは単に俺が線引きをしてるに過ぎないからな。」

「線引き、ですか？」

「そう……。ただの汚れを知らない無垢な子供の『里見』と薄汚れた血まみれの妖魔もどきの『銀牙』。その線引きだ。」

久遠君はそう言いながら自分を嘲笑うかのような笑みを浮かべていました。

悪いとは思いましたが精神感応テレパスの力を使い、心を読ませてもらうと彼の心は後悔や苦悩、不安などの負の感情が入り混じっていてそれを読んだ私の心までも締め付けられるように苦しくなりました。

「妖魔もどき……。？それに、血まみれって……。」

律さんが困惑した心をそのまま表に出して声を発していました。

「順を追って説明するか。・・・『里見』だった俺があの日にしゅ、いや、でかい狼に喰われたのは覚えてるな？」

同時に律さんの心に浮かび上がったのは大きな銀の狼に胴体を噛み潰されながら共に落ちていく男の子の姿でした。

私から見てもその男の子が致命傷なのは見て分かりますが、話からするとこの子が久遠君なのでしょうか？

「覚えて、る。ボクの、せいで・・・。」

震えながら言葉を搾り出す律さんの心を一気に罪悪感に染め上げられて今にも潰れそうでした。

「・・・はあ、やっぱりか。あのなあ、あれは俺がお前を助けたくて勝手にやったことだぞ？お前がそこまで気に病む必要はない。つか、気にするな。」

「でも！ボクのせいでくーちゃんは！」

「俺はお前が苦しむのも分かった上で助けたんだ。逆に俺が助けられたなら俺がお前みたいに苦しむだろうし、二人とも助からなかった場合は残された母さんたちを泣くんでどちらも俺が嫌だったから、母さん達を泣かせることには変わりないが、それでもお前が生きている分まじだと思ってお前を生かすことを選んだんだ。・・・俺はお前に俺のエゴを押し付けた。だから、恨まれる筋合いはあっても罪悪感を感じられる覚えはない。」

その言葉に心の迷いは感じられず、言い切ったときの彼の心は清々しささえ感じました。

その一方で、律さんの心は感情が入り乱れて困惑しているようです。

「くお君、もしかして、それを言うために帰ってきた？」

「まさか。」

悠璃さんの問いかけに何でもないのであるように答えましたが、一瞬だけ心が乱れました。

「・・・ふん。」

「何だよ・・・？」

「べつつに〜。」

悠璃さんはその心の一瞬の乱れを悟ったようで拗ねたような声を出して更に久遠君に密着しました。

（りっちゃんのことばかり気にかけて私のことは気にしてくれないのかな？）

顔には出ませんが悠璃さんは久遠君が自分のことを気にかけてくれないことに対して不満というより、哀しげな思いを持っているようです。

それを見た久遠君は彼女の頭に手を置いて慈しむような感情を抱きながら撫でて、撫でられた彼女は彼の手から求めている優しさを感じてとても満たされた温かい気持ちになっていました。

来るときもそうでしたけど、久遠君と悠璃さんは以心伝心しているかのようにお互いのことを分かり合っているようでそのときの二人の間には独特な雰囲気を感じます。

「で、話を戻すと、俺はあの人に体を食い千切られて死んだんだが、しゅ、じゃない、その狼に助けられてな」

「あれに助けられた！？何で！？」

「その前に死んだ人をどうやって助けるんですか？」

「それにさっきからしゅ、って何のことっ？」

「話の途中に割り込むな。それに質問を一度にいくつもするな。・まあ、助けられたと言っても、生き返ったわけじゃない。『里見久遠』の肉体の無事な部分と精神を使って別の命に転生させられたんだ。」

なるほど。だから、『里見久遠』は死んだけど、『銀牙』としてここにいるということですか。

「でも、そんなことが出来るんですか？」

「普通なら、無理だな。」

久遠君は普通なら、という部分を強調して言いました。

「しゅ、じゃなくて、あの狼はかなり高位の存在でな、そこら辺の神と比較したら失礼にあたるくらい存在で、しかも、力が『生命』に特化してるからわりと簡単に出来たらしい。・・・ちなみに、他

の奴等がやろうとすれば神格級の奴でも相手が受け入れられるかどうかで左右されるほどの超高度な術だからな？というか、人間では使えない。」

「とにかく、凄い存在の凄い術で転生したってことだよな？」

「簡単に要約するとそうだな。そうやって生まれた奴らが『眷属種』って存在で、つまり、俺はしゅ、じゃない、あの狼に仕える種族であれが俺の主人ってわけだ。」

「でも、精神は人間だったころのままだから久遠ではあるけど、里見ではなくて銀牙ということですか？」

「そういうことだ。」

「さっきから主人って言いたかったんだね？」

「転生した際に本能レベルで主人って擦り込まれるからな。自然とそう言いたくなるんだ。」

「でも、あれがくーちゃんの命を奪ったんだよ！？」

律さんが激昂して久遠君を睨み付けます。心の内は怒りで荒れ狂っていて、行き場のない怒りを目の前にいる唯一事情を知る久遠君にぶつけているようです。

「しかし、主人をあそこに封印したのは人間で俺も律もあるとき一番近くにいた人間だった。今までの恨みをぶつけるにはうってつけの存在だ。」

「そんなの向こうの勝手な理由じゃないか！」

「そうだ。けど、そもそも主人が封印された経緯からして俺一人が犠牲になっただけで済んだのはむしろ運がよかったと言うべきだ。それに俺自身こうして転生させてもらっただから負い目しかない。」

「どうということっ？」

「主人は元々、人間に対してかなり友好的な存在だったんだ。人里離れたところで暮らしていたんだが、ある日人間が迷いこみその人間の悩みを取り払ってやった。その話が広まって腐った奴らに力を狙わた挙げ句、悪役に仕立てあげられて封印されたんだよ。封印の中での長い時は主人の人間に対する感情を一時でも狂わせるのに十分だった。だから、一番身近にいた人間を襲った。」

話している間に久遠君の心の内にも憎悪が渦巻いて来ました。

「そんなこと嘘に決まってる！」

「嘘じゃない。転生したときに主人の記憶が俺にも流れて来た。転生術は自分に近い存在を作るゆえに主人の記憶が流れ込んでしまいうらしい。だから、俺には主人の苦しみが分かるし、それを許している主人に対して感謝している。それに、人間に対しても少なからず含むところがある。」

「それは私達にも憎しみを抱いているということですか？」

「俺は実体験したわけではないから憎しみを抱くのは人間という種だが、個人的な知合いには憎しみを抱く事はない。無関係な人間に

無意識の内に苛つく程度だ。もっとも、思い出している内は違うがな。」

私が能力を使って心の内を憎悪を感じとったことにも当然気づいていて、最後に私に言うように付け加えてくれました。

「律、お前が憤りを覚えるのも分かるが、主人の事情も少しは考えてくれると助かる。」

「……。」

律さんはまだ納得はしてないようですけど、少しは怒りが収まって来たので黙っていました。

「ここまでがあの日起こったことで、ここからは今までの話だ。・  
・それを聞いてから俺と今後、どう接するか考えてくれ。どんな選択をしようとも俺は構わないし、俺はお前たちの味方である。」

そう言いながら心の内では不安が渦巻き、恐れなどの感情が広まり、ただでさえ薄暗いもの感じていた心の内に灰色の霧がかかったように感じたのでした。

## 第八話

『里見』と『銀牙』

Side Ayaka（後書き）

次はこの作品の世界観の説明になると思います。うまく出来ていなかったり、分かりにくかったりするかもしれませんがよろしく願います。

第九話 罪の在り処 Side Ritu(前書き)

思ったより長くなりました。

## 第九話 罪の在り処 Side Ritu

嬉しいけれど納得できない事もあってまだくすぶるものはあるけれど、そんな顔を見ていたらそんなことはどうでもよくて、どんなことがあっても受け入れる覚悟を決めた。だって、それはボクが歩ませてしまった道なのだから。

### Side Ritu

「俺を眷属種に転生させてまず主人はあの封印が解けたことを察した追っ手が来る前にあの場所から逃げた。いくら主人が強くて長い間封印されていたせいで力が弱っていたからな。」

ボクが知らないあの日から今までの空白の時間をくーちゃんは語りはじめた。

「そして逃げ込んだ先が今現在、俺が所属している、剥離世界『裏

チャイルド

平安京』だ。」

「チャイルド剥離世界？」

「それもまだ知らないのか？」

ボクが首を傾げたのを見て、くーちゃんが絢香に聞いた。

「いえ、律さんが聞いていなかったただけだと思います。」

「悠ちゃんも知ってるよつ。」

絢香が苦笑しながらそう言つと、くーちゃんに抱き着いたままの悠も同調した。

というか悠、さっきからくーちゃんにくつつきすぎ。くーちゃんも注意すればいいのに昔から悠に甘すぎだし。

そんな思いでくーちゃんを見ていると呆れたような安心したような顔をしていた。

「そういうところは相変わらずのままか。」

「別にいいじゃん。」

そう言うときくーちゃんは溜息をついた。

「……今俺達がいるこの地球という世界が全ての世界の中心である、マザー始まりの大地。そこから独立して生まれた世界がチャイルド剥離世界だ。」

「つまり異世界？」

「異世界というほどでもないな。剥離世界チャイルドは地球上の何かしらに影響を受けて存在しているし、行き来もさして難しいことでもない。そうだな・・・、地球とは隔絶した環境、文化を持つ地域ぐらいの認識でいいだろう。」

えっと、かなり遠い外国ってことでいいかな？

「何で『裏平安京』なんて名前がついてるのっ？」

「あそこは世界の中心は平安京を再現して創られているからだ。住んでるのが日本由来の妖魔ばかりでトップが平安京を気に入っていたからってのもあるがな。」

「妖魔ばかりって、そんなところに住んでいたんですか？」

「俺は元は人間だが、そのときは既に眷属種、半妖という存在だぞ？まあ、便宜上、半妖と名乗っているが本来の半妖の定義から外れているから人間でもある妖魔、というのが正しいんだがな。」

くーちゃんは自嘲を浮かべていた。

「人間と妖魔の間に生まれた半妖でもなく、作り替えられたこの身体は人間でもなく、元が人間であるだけに妖魔でもない。真の意味で中途半端な存在。誰が言い始めたのかいつの間にかついた名が『アウト一匹狼』。・・・中々に洒落がきいてる。」

声にも自分を嘲るような色が混じっていて、その声が痛かった。

「洒落がきいてるっ？」

悠もくーちゃんの様子を敏感に感じとって暗いものを払拭しようとしてさっきより明るい声を出した。

「これだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・イヌミミ？

突然、くーちゃんの頭から銀色の毛並みの犬の耳のような生えてきて思考が止まってしまった。

「わっ！尻尾も生えてるっ！」

悠が騒いでボクもくーちゃんの犬耳？と同じ銀色の尻尾に気づいた。

「眷属種は主人に影響されやすい上に俺は足りない部分を主人の力で補って転生したから特徴が自然と主人に近くなったんだ。・・・ここではやらないがその気になれば狼に変化も出来る。」

「だから洒落がきいてる、ですか？」

絢香の問いかけにくーちゃんは頷いて答えた。

「くお君がワンちゃんっ？」

悠が揺れ動く尻尾を目で追い、片手でミミをいじりながら少しズレたことを言つと、くーちゃんは少し口を綻ばした。

「間違つてはいないが流石にワンちゃんはよしてくれ。」

くーちゃんがそう言いながら頭を撫でると悠は恍惚とした表情でそれを受け入れる。その姿を見ているとどちらかというと悠の方がくーちゃんに甘える犬みたいに見えてくる。

「・・・『裏平安京』で目覚めて自分の状態を把握したとき真つ先に元の場所に帰してくれと頼んだが・・・、眷属種として生まれ変わった俺の力は野放しにしては置けなかった。主人という強力すぎる存在の眷属となればその力の利用価値や希少性は決して低くはないからな。少なくとも自分の力を扱えるようにしてある程度の脅威をはねのけるだけの力が必要だった・・・。」

くーちゃんの顔に一段と暗い陰がさした。

「・・・絶対に帰る決意をした俺はある人物に勧められ力をつけるために『裏平安京』の戦闘機構『警邏』に入隊した。・・・それからは、毎日が、殺し合いだった・・・。」

「・・・。」

その声に押し込められた苦痛に心が張り裂けそうに今すぐに謝り倒したい思いがボクの中で駆け回ったが、今はそのときじゃないかと思いとどまった。

「最初は、人でなくても殺すのには抵抗があった・・・。だが、何時からか殺すことに何の感慨も湧かなくなった・・・。人を初めて殺した日には胃の中ものを全部吐き出した・・・。だが、何時からか人を殺すことにも抵抗はなくなった・・・。泣いている子供を非常にきつて殺し罪悪感に押しつぶされそうになった・・・。だが、何時からか無慈悲に切り捨てる事が出来るようになってし

まった……。一つの集落を殲滅<sup>せんめつ</sup>し作り上げた惨状を見て自分の罪深さを思い知り己を嫌悪した……。だが、何時からか割り切ってしまったている自分に気づいた……。血塗れになって立つ自分を見て愕然とした……。だが、何時からか『俺』は、もう、『僕』に戻れないことを理解していた……。

……。……。ごめん、なさい。

「もうあの頃の自分には身も心も戻ることが出来ないと自覚した日から俺は何のために戻るのか、その疑問を抱きながら殺した。迷いを抱きながら戦場に立った。答えを探しながら暴れた。行き場のない慟哭の叫びを雄たけびに変えた。」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

「腕を振るった。その腕で肉を切り裂き骨を砕いた……。足を踏み出した。その足で亡骸を蹂躪し新たな死を引き寄せた……。声を上げた。その声で破滅を導き死を与えた……。目を開いた。その目で数多の屍を見下ろし生きている者には恐怖を植え付けた……。」

何て、ボクは、愚かなのだろう。謝って全てが許されるとでも思っていたのだろうか？彼を地獄へと突き落した罪がその程度で洗い流されると思ったのだろうか？

「誰かが言った。アレは人であるがゆえに同胞の命を奪うことに何の躊躇いもない、と。誰かが言った。アレは人に害をもたらず獣で

あり、人であるはずがない、と。誰かが言った。アレはどちらにもなれぬ哀れなもの、戦い続け、血を浴び続け、屍を作り続けていながらもなお過去の思い出に縋らなければ自己を保つこともできない弱者である、と。」

許されない。許されてはいけない。ボクはあの日にくーちゃんを殺してしまった……。その罪は未来永劫消えることはない。罪の十字架を背負い続ける義務がある。

「……俺は、何のために戦っているのか分からなくなった。ただ与えられた任務を遂行して殺し続けた。だが、ある日、ふと思った。『俺』は『僕』には戻れない。なら、『僕』の想いは何処にいく？ただ大切な人たちの傍で笑い合っていたい、という想いは？……俺はそのときに誓った。『僕』の想いの中に自分はいなくとも『俺』は『僕』の想いを引き継ぐことを。『僕』が護りたいと思ったものを命に代えても護り抜くことを。『僕』が幸せを願ったものを自分の全てを賭けて幸せにすることを。」

ボクの人生を全て捧げてでも罪を償わなければ

「だから、そんな顔は止めてくれないか？」

「……………え？」

「こんなことを話すとお前が自分を追い詰めるだろうってのは幼い頃の付き合いで理解してるつもりだ。けどな、一度お前を極限まで苦しめて俺は自分の罪を、自分の心の内を言う必要があったんだ。……お前を罪の幻から解放するために。」

幻？何を言ってるの？君を殺したのはボクでそれは許されないこと。

「お前のせいじゃない。」

「ッ!!」

「あの日に肉体的に『僕』を殺したのは他の選択肢を選ばなかった『僕』自身だ。そして、空白の月日の間に『俺』が苦痛から逃れるために精神的な『僕』を殺した。・・・お前は誰も殺しじゃない。」

「違ッッ!!」

ボクが殺した。ボクがくーちゃんの命を奪った！

「違わないさ。お前はただ怯えているだけだ。あの時には死の恐怖に、今までは『僕』の存在が消えてしまうことに、今は俺がお前の中の『僕』を塗りつぶしてしまうことに。」

「違ッッて言ッてるだろ!!」

「律さん!!」

絢香が殴りかかろうとしたボクの邪魔をしてくる。

「りっちゃんは、臆病だよ・・・。」

悠の静かな声にボクは彼女を睨みつける。

何も分からないくせに！この罪の重さを何も！

「どうして、くお君のことを否定しようとするの？」

「どうしてって、間違っただけを言うからに決まってるじゃないか  
！！」

悠が首をゆっくりと横に振る。

「そうじゃないよ。どうして、今のくお君の存在を否定するの？そ  
んなにくお君を殺したいの？」

「どういう意味！？」

ボクがくーちゃんを殺したいなんて思うわけがないじゃないか！

「さっきから自分がくお君を殺したって、その罪を償わないといけ  
ないと思ってるよね？」

「それがどうかした！？さっきから本人も死んだって認めてるじゃ  
ないか！！」

「・・・確かに『里見 久遠』は死んじゃったよ。でも、『銀牙  
久遠』としてくお君は生きてるんだよ？」

「だからボクはくーちゃんに罪を償わなきゃいけないんだ！！」

「・・・一度死んで、生まれ変わってもこうしてここにいるのは『  
里見 久遠』が『銀牙 久遠』になっただけでくお君はくお君のま  
まなんだよ？・・・りっちゃんが言ってるのは『里見』と『銀牙』  
を別の存在として見てるとしか思えない。ここにいくお君を否定  
して、過去のくお君に縋っているようにしか見えない。」

「ッ!!」

とつさに言葉が出なかった。それは今まで見てきたどんな目より悠  
の目が冷やかだったからだけでなく、どこかでそれを認めている  
自分があるから。

「・・・さっきからくお君が言ってるのは概念的な死。私達だって  
そうだよ? くお君がいなくなつて私はただくお君に甘えていた自分  
を捨てて今の私になった。過去の私は死んで今の私として生きてる。  
・・・くお君が言ったのは、過去の子供のままの『里見 久遠』の  
死と肉体的に一度死んだという重傷とかと同じ肉体的損壊の事実の  
こと。でも、ここに今の『久遠』、『銀牙 久遠』として生きてい  
る。・・・りつちゃんがかくお君に殺してしまった償いをしたいって  
いうのは『久遠』という存在をあの日に殺して、その彼に一番近い  
存在に許しを請う行為。つまり、死んでしまった人に対する償いを  
代わりにその遺族にしようとしてるのと同じじゃないかな?」

そんなことは・・・

「でも、それは、逃げてるだけだよ・・・。『久遠』という存在を  
『里見』で終わらせることで『銀牙』の味わった苦痛から、くお君  
を変えてしまったという事実から、りつちゃんの罪の姿から、『久  
遠』を殺したというありもしない罪に逃げてるんだよ。」

そんな、こと・・・

「・・・俺がこうして会いに来なければお前は俺を殺してしまった  
という罪に苛まれ続けるだろうし、俺の過ごしてきた日々を知れば  
その重さに目を逸らしたくなるとは思ってた。だが、俺が一度でも

お前に殺されたって言ったか？一度でも恨んでいると言ったか？・  
・俺はお前の存在を支えに心を保った。お前に会うために心を奮わ  
せた。俺が腐らずにこうして心を保っているのはお前のおかげ  
だ。」

・・・・・・そんな、こと

「そんな、こと、いわないで、よあ・・・。」

顔を俯けるとぐちゃぐちゃになった頭の中を複雑な想いが渦巻く。

分からなくなる。どうすればいいのか。

泣きたくなる。悲しみではなく。

甘えたくなる。その優しすぎる言葉に。

「ボクはあ・・・、ボク、はあ・・・。」

「何も悪くないさ。ただ、俺の身勝手な行動で苦しめられたただだ。」

ボクが、くーちゃんを、傷つけた・・・。

ボクが、くーちゃんを、苦しめた・・・。

ボクが、くーちゃんを、変えてしまった・・・。

なのに・・・、

「どうしても罰を受けたいって言うなら、この数年間ずっと罪の幻に苛まれてきた。それで十分だろ？被害者である俺がそう言ってるんだ、何の問題もない。」

どうして、そんなに優しいの・・・？

どうして、許してくれるの・・・？

どうして、こんなに温かいの・・・？

「ひつく・・・、ごふえ、ん・・・、ごめん、なぜあ、い・・・。」

ふと・・・、温かい何かに、包まれた・・・。

「ん・・・。気にするな・・・。」

かけられた温かい声が。

背中を撫でる温かい手が。

寄りかかった温かい体が。

「う・・・、」

どうしようもなく・・・、ボクの心を、溶かす・・・。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！！」

一度破れてしまった心の壁は容易くボクの心の全てを吐き出し、た

ただ、この温かな体に縋って、この温かな腕に抱かれて、この温かな優しさに全てを委ねてしまう。

恥も外聞も罪も後悔も全てを投げ出して、ここにある優しさに、与えられた免罪符に、霞んだ罪の向こう側に、この温かい場所に、この人に、ずっと抱かれていたかった・・・。

第九話 罪の在り処 Side Ritu（後書き）

書いていて、これは言いたいことがうまく伝わるだろうか？とも思いましたが、他に言い回しが思いつかなかったのでそのまま投稿しました。

とりあえず、これで律の罪の意識は大分軽くなりますが、完全に無くなったわけではなく負い目を感じています。そのせいで恋心にも素直になれず・・・、という展開を考えています。それと、魔法チックなものを早く出したいです。

## 第十話

弱さ

Side Kuon (前書き)

今回は後書きにアンケートがあります。

## 第十話

弱さ

Side Kuon

あの涙でどれだけの苦しみを取り除かれただろうか？俺は、俺の全てを持って『僕』の想いに報いてみせよう。俺がどれだけの血にまみれ、苦しみにもがき、苦境に立たされようとも、大事な者たちは全身全霊を持って支え続けよう。『僕』が想い描いた未来のために、俺が人であるために・・・。

Side Kuon

あのあと、俺はあのまま律が泣き疲れて眠るまでずっと律を抱いていたんだが、悠璃達は

「悠ちゃんは帰るけどりっちゃんに変なことしちゃダメだよっ？」

と言って悠璃が出て行き、絢華も気をきかせて出て行った。

律をベッドに寝かせて、帰ってきた絢華に後のことを任せて莉里の自宅兼現在の俺の下宿先に帰り、帰ってきた莉里に学校で悠璃と律を泣かしたことで色々と言われ、学校で広まったらしい俺の不名誉な称号に気が重くなり、更に俺の服についた律の涙のあとについて追及されて、律との関係から洗ったらしい俺の身元についての確認と変化に対しての詰問を受けて律達に話したのと同じような話をしてから一夜が明けた。

「ふむ……。少々口が軽すぎではないか？」

「あいつは腐ってもこの総責任者だぞ？下手にごまかして後で問題になったらまずいだろ。それに俺は特異性や希少性なら十分に価値はあるが、戦力としては並程度、交渉のカードにもならない。なら、話したところで問題はないし、一応は口止めもしておいたから大丈夫だろう。あいつも俺の価値を見誤る馬鹿じゃないさ。」

ついさつき現れたクロに昨日のことを話すと小言を言われたが、俺も考え無しに話したわけではないと反論した。

「希少性、か。当然『<sup>ファースト</sup>四柱』についても知っているだろうな。」

「『生命』に特化した封印されていた銀の狼、そこから主人に辿り着くのは簡単だろうよ。」

神すらも超越した全世界の礎と言われている存在『<sup>ファースト</sup>四柱』が一柱、『魂』。

律達には『生命』に特化したと言ったが、本当は『生命』の根源である存在『魂』だ。

本来なら人間如きに封印されるような存在じゃないが、主人の人間への優しさと油断、戦った相手の『血統特性』<sup>ブラッド・クオリティー</sup>の中でも飛びぬけて特殊だったその力と剥離世界<sup>チャイルド</sup>を複数利用した大規模な封印に屈せざるを得なかった。

「しかし、それなら『六法家』<sup>ろっぽうけ</sup>にも辿り着くのではないか？それはお前の望むところではないだろう？」

「そうなんだけどな……。けど、ここに来た以上知られるのも時間の問題だ。……。そのことに関してはおじさんと蘭さんにも頼まれてるが、俺には防波堤になることぐらいしか出来ない。」

「失われた法『断刃名』<sup>たちばな</sup>がこの世界に舞い戻る、か……。人間達にしたら大変なことだろうに。」

「元々、『断刃名』<sup>たちばな</sup>がこの世界から身を引いたのは封印を人知れず管理するためだ。その封印が解ければ舞い戻るのも自然の流れじゃないか？」

主人のような高位存在を封印するための術式がそう簡単に破れるはずもなく、破れるにはそれ相応の理由、封印者の血を引く者による封印への干渉があったからだ。俺があの日にあの封印の社の札に触れたところで剥がすことなど出来なかっただろう。

しかし、同時にあそこには人を遠ざける結界が張ってある。誰かに連れて行かない限りその場所に気づくことの出来ない結界が……。ゆえに、先代が次の世代に封印を護るに相応しい者になるまで教

えないことで封印を完全に護ることが出来るはずだった。

ただ、何事にも例外が存在した。

生まれ変わった後に知った、俺が生まれながらに持ってしまった『イレギュラー・クオリティ』アウト・ウォーカーの特異特性』、『位相微剥』。あらゆる結果、魔法陣の効果を受け付けない能力のせいで俺はあの場所を偶然にも見つけてしまい、律に教えてしまった。

「結局は俺のせいなんだよな・・・。」

それを言わないのは俺の弱さなんだろう。律に否定されることを恐れる俺の弱さ。

「・・・何も今のお前にはそれしかないわけではなかるうに。」

「半妖の俺には、な。だが、人間としての俺にはどうしても必要なことなんだ。それを失えば俺は身も心も妖魔に堕ちる。」

俺の人間としての心を支える柱が崩れれば、俺は自分を妖魔だと認めてしまう。人間としての銀牙 久遠は律を護ることを第一としているのだから。

「妖魔である我には解らぬな。」

「そりゃあ、人間の心だからな。」

「・・・まあ、いい。とりあえず、連絡事項は今のところはないがあまりここに入り浸りすぎるなよ？お前を慕うものや厄介ごとを押し付けてくる奴等がいるのだからこちらにもたまに顔を出せ。」

「元よりそのつもりだ。厄介ごとをこっちに持ってこられたら面倒だからな。」

そう言うところろは飛び立っていった。それを見送ると俺は人目を避けるために少し遠回りをしたせいで遅れてしまった時間を取り戻すために若干、足の速度を速めた。

~~~~~

昨日もそうだが今日も今日で周りの視線が痛い。

「悠璃、俺は昨日だけだって言っただは？」

「えっ？そうだったかな？」

「そうなんだ。というわけで、離れる。いちいち休み時間になるなら俺に抱きつきに来るな。」

今日は悠璃が休み時間になるとすぐに俺に飛びついてくるため主に男共の視線が痛い。

「えっ！くお君、悠ちゃんみたいな可愛い子に抱きつかれるのは嫌っ？」

「嫌じゃないが昨日も言ったとおり周りの目を気にしろ。」

「私は気にしないよっ？」

「俺が気にするんだ。ただでさえ不名誉な噂が出回ってるんだ、これ以上は勘弁願いたい。」

「大丈夫っ。悠ちゃんはお君の味方だよっ。」

悠璃は一向に離れる様子を見せない。

「絢華、律、どうかしてくれ。」

「悠璃さん、久遠君もこう言ってますが？」

「……。」

絢華は悠璃をたしなめたのだが、律は何か言おうと口を僅かに開くがすぐに思いとどまって口を閉ざしてしまう。

朝から俺と話すときはこんな調子の律にも困っていた。

絢華や悠璃と話すときは普通なのだが、俺に向かって話すときだけこんな調子でありそのせいで周りからはまたしてもいらぬ勘繰りを受けている。

「……なあ、律。」

「え？な、何？」

「昨日のことを気にしてるんだったら本当にお前が気に病むことじ

やないんだぞ？」

「あ、その、ね……。」

こちらを真つ直ぐ見ないでチラチラとこつちを身ながら要領を得ない返事を返す。

「うーんと、くお君、そうじゃないんだよっ？」

「分かるのか？」

「いきなり今までの考え方を変えて接するというのも難しいですし、あんな姿を見られた後だと普通にしているのも難しいと思いますよ。」

律の代わりに悠璃と絢華が答える。

「そうなのか？」

「あ……。その、あんなみつともないところ、見られたし……。寝顔も、でしょ？」

「まあ、そうだが、そんなことか？」

「そんなことつて、くお君分かってないよっ。乙女の泣き顔と寝顔を異性に見られるのは凄く恥ずかしいんだよっ。」

悠璃が若干ムツとした様子で言ってきたのだが、いまいち理解できない。泣き顔や寝顔ごとき気にする奴らはあつちにはいなかったかな。

「みつともないどうこうで言えば、もつとひどい奴ら腐るほど知ってるぞ？・・・泥酔すると必ずと言っていいほど何故か俺の寢床を占領しに来て涎を垂らしながら馬鹿みたいにいびきをあげて眠る奴、夫婦喧嘩をするとどんな時間だろうと俺のところに泣きながら愚痴をこぼしに来て途中からはしまりのない顔でのろけ話を延々と話し続ける阿呆、喧嘩をすると何故か俺に第三者からの意見を求めにきながら俺の意見も聞かず家で暴れる馬鹿が二人、毎朝のごとく飯をたかりにきては文句をつけるクソ女、周りの迷惑顧みず作り出した危険物の実験を俺でするキチガイ、何故か家で酒盛りを挙げようとする絡み酒と泣き上戸の凹凸コンビ、暇だからと言って俺に喧嘩を吹っかけてくるクズ、我儉な娘とへたれな父親、放任主義の母親の迷惑家族、いつもいつも面倒な仕事ばかり押し付けてろくな情報もよこさない女狐、それに、」

「く、くお君っ？落ち着いてっ。」

「っ、机が壊れちゃいますよ？」

「と・・・途中から思い出して愚痴になつてたな。イラつくあまり机を強く押しすぎてヒビを入れちゃった。」

「・・・まあ、そういうことだから俺の前でよほどのことをしない限り何とも思わないから気にするな。」

「そう、みたいだね。」

律は少し呆れたように笑っていた。

「うん・・・。ぎこちないかもしれないけどーちゃんとちゃんと

向き合っていこうと思う。」

「そうか……。あまり深く考えすぎるなよ。俺はお前の前にいる、そのことをただ受け入れればいいさ。」

律の気分が幾分か軽くなったようだ。

律もあまり俺にばかり構っていらなくならだろうからな。軽く考えてくれるくらいでいい。

「で、悠璃、そろそろ次の授業じゃないか？」

休み時間が終わろうとしているのに未だに俺にひっついてる悠璃に帰るように促す。

「何言ってるの？次は悠ちゃんのクラスと一緒にの授業だよっ？」

「そうだったか？」

「はい。次はやっと初めての実技授業です。学年を二つに分けて三クラス合同でやるんですよ？」

「初めて、か。律なんかは暴れられなくてストレスが溜まってるんじゃないか？」

「う……。いいじゃん、ボクには体を動かしてるほうが性に合うんだから。それにやっとこれの出番がきたよ。」

そう言って律は机の脇に立てかけてあった竹刀袋を取った。

「中は木刀か？」

袋の重心から竹刀ではないと思い問いかけた。

「うん。ボク愛用の木刀。武器があるなら持ち込み自由っていうから持ってきたんだ。」

「くお君は何か持ってきてないの？」

「俺は必要がないからな。そもそも武器の持ち込みっていうのは本人にとって一番集中できる状態にするためだろうしな。」

術の発動には術者の想像力がものを言う。ゆえに、初心者はまずは集中してイメージを作り上げて術を発動する。

慣れれば意識を散逸しながらも術を使えるようになるがそれを律達に強いるのは酷だろう。

「さて、ということは場所は別のところか。」

「はい。第三訓練場だそうです。」

「早く行こつ。」

「そうだね。何時の間にか皆、行ったみたいだし。」

そうして俺たちは教室を後にして訓練場に向かった。

さて、律は『断刃名』^{たちはな}としてどれくらい強くなったかな？悠璃の特性^{クオリティ}も気になるし、絢華がどれだけだけの訓練をつんでいるのかもこれで

計
れ
る
な
・
・
・
。

第十話

弱さ

Side Kuon (後書き)

ようやく次の回から魔法っぽいものが出せる・・・。
というわけで、次回はこの作品での魔法というものの説明のようなものになると思います。

さて、前書きで予告したアンケートですが、答えて頂きたいことが二つあります。一つはこの作品のタイトルです。今までは作者の処女作であるこの作品は更新のことだけ考えてタイトルは適当なものを付けていました。そして今回十話（実質十二話）まで書けたのでちょうどいいと思い、読者の皆様方に次の三つから決めていただくことにしました。

A、一匹狼

B、人でもなく、魔でもないモノ

C、狼の誓い

の以上、三つです。作者の駄目脳からはこんなものしか捻り出せませんでしたがどうかよろしく願います。

そして、二つ目はこの作品のキーワードです。中々この作品に合うキーワードが思いつかないので思い切って読者の方々に聞いてみることにしました。この作品に合うと思うキーワードを二つ選んで送ってください。そのうちの多いもの上位五つを採用したい思います。

アンケートは次回の投稿までに集計しますのでどんどん感想の部分に書いて送ってください。よろしく願います。ついでに、ご意見・ご感想などがあると嬉しいです。

番外編 ここまでの設定。 (前書き)

今回は本編の補足となっています。

アンケートは引き続き実施していきます。どんどん送ってください
お願いします。

番外編 ここまでの設定。

虚「どうも本作品の作者の虚言の騙り手です。今回はやっと十話まで書き終えたのでそろそろ設定や登場人物の整理をしようと思い、こうして書くことにいたしました。しかし、ここで私一人が延々と話し続けても面白くはないでしょうからゲストをお呼びしております。こちらの方です、どうぞ。」

舞「つて、何であたしなんだよ？本編じゃまだほとんど出ちゃいないぞ？」

虚「だからこそ、こういうところで出しておこうと思ったんですけどね。」

舞「じゃあ、蘭や刃も出せばいいじゃねえか。」

虚「三人いつぺんに登場させると收拾がつかなくなりそうなので、その中で一番気に入っている舞華さんにご登場願いました。」

舞「・・・あたしを気に入ってるってことはこの先出番が増えるのか？」

虚「さあ？どうでしょう？」

舞「・・・まあ、いい。つてか、今回こんなのを書いたのはあれだろ？思った以上にアンケートの集まりが悪かったから次の話を出す前にもう一度、適当に何か挙げて呼びかけようって思ったからだろ？」

虚「さあ、さつそくキャラの紹介にいきたいと思います。まずは主人公の銀牙ぎんが 久遠君くおんです。」

舞「誤魔化しやがった……。」

銀牙ぎんが 久遠くおん。

幼少の頃、封印から解き放たれた『魂ソウル』から律を救うため自らを犠牲にした。その後、『魂ソウル』によって元の肉体を元に『眷属種』という存在に転生させられ、剥離世界『裏平安京』で力をつけていった。現在は『裏平安京』の戦闘機構『警邏』の独立執行部隊『黒組』に昇格し、後見人である上司との契約通り自由に動き回れるようになり律達の元に戻ってきた。

元々は心優しい少年だったが力をつけていく過程で自分がどんどん変質していくのを自覚して精神がかなり脆い状態になり、律達のために戻って護り抜くという意思を元に精神を立て直している。根っこの部分は変わらないが大事なもののためならどんなにも冷酷になれ、自分を含む全ての犠牲をためらわない。

容姿は髪を首の辺りで括って腰まで伸ばし、毛先から四分の一ほどが銀色に染まっていて片方の眼が紅い。身長は成人男性の平均よりやや高め、顔立ちは人によっては見惚れる程度に整っている。

通り名は妖魔でも人間でも半妖でも、何ものでもないという揶揄を込めて『一匹狼アウター』。しかし、彼と関わった大半の人物は好印象を抱き、周りには人（？）が集まってくる。が、彼はそれを友愛程度のレベルでまでしか認識できず、何人かの女性は苦労している。

クオリティイレギュラー・クオリティイ特性は特異特性であるあらゆる結果、魔法陣の効果を受けつけない力『位相微剥』と『人魔混在』そして固有特性、『命脈干涉』、『魔法行使』。

舞「帰ってきたのは嬉しいんだが、過去のことを聞いた時はあいつをそこまで変えちまった生活を思うと辛かったな。」

虚「それでも根っこの部分を保てた彼の精神力はたいしたものです。」

舞「ってか、説明の中にも更に説明の必要な単語があるじゃねえか。」

虚「ですね。それはこんな感じになってます。」

『ソウル
魂』。

久遠を自身の『眷属種』へと転生させた存在。全ての世界の始まりとも言われている『四柱』^{ファースト}の一つであり、本来は実体を持たない存在であるが人間達と触れ合うために遥か古に狼の姿をとって人間へと接近した。そのときは普通の大きさであつたが、状況に応じてその大きさを変えられる。

そして、そのうちに信仰心の薄れてきた人間を離れて見守っていたが、ふとしたことから悪役に仕立て上げられ封印される。そして長い時を経て封印から解放されると身近にいた人間、久遠と律にその怒りをぶつける。しかし、谷底に落ちた衝撃と眼からの痛みで正氣に戻り、何の関係もない護るために自分の身を犠牲に出来る心優しい人間の子供を殺してしまったことにひどい罪悪感を覚えて自身の『眷属種』として転生させる。

『裏平安京』に逃げ込み傷が癒えた後、久遠をそこにいる最高責任者に預けて自分は他の『四柱』^{ファースト}達がいるどこでもないどこかに姿を消し、久遠を通して世界を見守ることにした。

眷属種。

高位存在が自身の手足となる存在を転生術を用いて作り出した存在。基本的に能力がその主人の影響を受ける。しかし、久遠のように主人の力によって作り出された部分があるようなものは容姿にもその影響を受ける。

チャイルド
剥離世界。

マザー
始まりの大地から派生した世界。始まりの大地から何かしらの影響を受けて成り立っている。

裏平安京。

チャイルド
剥離世界の一つ。平安京をモチーフにした街が存在し、そこに住みついている妖魔も日本由来の妖魔が多い。

警邏。

裏平安京の戦闘機構。表の世界でいう自衛隊、警察の役割のようなもの。

黒組。

警邏の部隊の一つ。独立執行部隊という名がついていて、処分されるべき妖魔の討伐を主な仕事にしている。また、所属するものは独自の裁量で処分の決定が下されていない妖魔を殺す権利を有している。

虚「こんなところです。」

舞「おい、特性は何処にいった？」

虚「それについては次回かその次辺りで説明が入るのでここで話すのは止めておきます。」

舞「そういや、特性の^{クオリティ}ところでいくつか出てない単語もあったな。」

虚「それはネタばれの話です。詳しい説明はまた本編で登場したときになりますが、今はこういう力を持っているということだけを紹介しておきます。ところで、本編にも出ていましたが、久遠君にそういう気持ちを持つていいんですかね？」

舞「うつ．．．．．いや、そりゃあ、マズイだろうけどよ。あいつが随分と男前になってやがるし、その、なんつか、あいつは強いんだろうけどよ、どこか弱いみたいな部分もあって支えてやりたくなるっつか．．．。ってか、そもそもお前が考えた設定だろうが！！」

虚「いや、最初はそのつもりはなかったんですけどね。悠璃さんの気持ちを書いているうちに何となくそっちのほう面白いかなあ、と思ってそうしちゃったんです。それに親子とは言ってるけど、転生して別の存在になったんだからギリギリOK？って思ったんで。」

舞「．．．．．ってことは、あたしと久遠の可能性も？」

虚「さて、次はヒロイン達の紹介にいきましょう。」

舞「何とか言え！コラ！」

橘たちばなりつ律。

幼少の頃、封印を解いてしまい目の前で『里見 久遠』の最後を見せつけられてしまったせいで彼に対してはいつもは普通に接することが出来るが、肝心なところでは負い目を感じてしまい一歩引いてしまう。

久遠失踪後、半ば錯乱状態に陥りしばらくの間部屋に閉じこもり泣きながら自己嫌悪をして自分を責めるだけの日々が続いたが、周囲の協力のおかげで何とか立ち直った。しかし、何時もどこかで罪の意識に苛まれていて悪夢にうなされることが多く、命日には一日中部屋に閉じこもり自分を責めていた。

父から代々、家に伝わる古流剣術を教わり、その腕は全国に名を刻むほどである。本人は知らないがその剣術にはもう一つの顔がある……。

容姿は黒髪をポニーテールして眼も髪と同じ黒色。顔は美人に分類されてその人当たりのいい性格から男女の人気（比率は女子の方が多い）が高いが久遠同様、恋愛事に疎いために彼氏ができたことはない。

クオリティ・ブラッド・クオリティ・バーシユ特性は血統特性である『封魔相克』と固有特性、『魔法行使』。

里見さとみ悠璃ゆうり。

まだ自我さえ発達していなかった頃、両親を事故で失い同じ事故で夫を亡くした里見家に引き取られる。幼い頃は引っこ込み思案なところがあり一番心を許していた義兄、久遠の後ろにいつもついて回っていたが、段々と恋心が芽生えてきてそれが何か分からず戸惑いながらも久遠にべったりだった。

しかし、久遠が失踪すると彼女も落ち込んだが、律のあまりの落ち込みように自分が励まさないといけないと思うようになり人前で

は明るく振舞うようになった。時とともに心が成長すると自分の恋心を自覚してしまい、兄妹という壁に苦しんでいると血が繋がっていないことを知らされ束の間だけ歓喜に包まれるが、すぐに久遠がもういないという現実には悲嘆にくれる。それでも健気に久遠を想い続けた彼女は他に恋をする気もないらしく一生を独り身で終えようと考えていた。

そんなところに久遠が生きて帰ってきたから積極的に久遠にアプローチをかけて、恋人ひいては妻の座を狙っている。目下の敵は律、絢香と裏切り者の母だと思っていて向こうにもライバルがいることに思い至っていない。

容姿は茶色い髪をツインテールにしている小柄の体とその明るさが合わさって小動物のような雰囲気醸し出している。彼女もそれなりに人気はあったのだが、久遠を想っていたため男に興味をしめさず、律とのレズ疑惑もあったのでそれを利用して男たちを煙に巻いていた。

クオリティイレギュラー・クオリティ
特性は特異特性である『魔力回収』と固有特性、『魔法行使』。

魅宗 みむね 絢香 あやか

とある資産家の娘として生を受けたが生まれ持った特性のせいで家族からも嫌悪の目で見られ、外で知られてからは虐めに合うはめになった。それを慰めようとして近寄ってくる人間の下心も分かっ
てしまい、人間という生き物の心の恐ろしさを知り一時期人間不信に陥る。

何時からか偽りの表情という仮面を被って暮らすようになったが、学園の試験を受けたことで自分の力のことを知り、この力を制御するために学園へ通うことを決意した。

学園での生活で律や悠璃と知り合い、その綺麗な心に惹かれて一緒にいるようになる。そして、久遠との出会いで彼を意識し始めた。
・
・
・

容姿は黒のロングヘアを腰まで伸ばしてカチューシャをつけていることが多く、眼鏡をかけている。美人だがその特性ゆえに人をさけ、周りも気味悪がって近寄ってこなかったため彼氏がいたことはない。

イレギュラー・クオリティ
特性は特異特性である人の心を読む力、『テレパス精神感応』と『ラブラ先見予告』、そして固有特性、『魔法行使』。

虚「と、今のところはこんな感じです。」

舞「何か全員、暗めの背景だな。」

虚「それは私が普通の人間というものを描写するのが苦手だからです。どこか暗いところを持っていた方が書きやすいんですよ。」

舞「ところで、虚言。聞きたいことがあるんだが、」

虚「何ですか？」

舞「何でヒロインの紹介をしてるここであたしが出ていない？久遠とくつつく可能性がないってことか？」

虚「……………」

さとしみ
里見 まいか
舞夏。

久遠の母であり、悠璃の義母。夫を亡くしてからは悠璃を引き取り女手一つで二人の子供を育てた。久遠がいなくなってから彼女もショックを受けたが、子供達の手前、情けない姿を見せることは出来ないと気丈に振舞っていたが、命日にはどうしても暗くなっ

していたが、あの日封印が解き放たれてしまいそれを感じて急いで駆けつけて現場で呆然としている律を最初に見つけた。封印が破れてしまつて自分の不注意を責めていて、更に久遠の命を奪つてしまつたと思い久遠とその死の悲しみに暮れる舞夏と悠璃と律に申し訳なさを抱きつつも裏の事情を話すわけにもいかず秘密にしつづけていることに罪悪感を抱いていた。

容姿は優男という言葉がしっくりくるような姿だが、実際は律も及ばないほどの剣の使い手。しかし、そのことを知っている人間は少ない。

クオリティブラッド・クオリティ
特性は血統特性である『パニッシュ封魔相克』と固有特性、『インヒューレント・クオリティマシク魔法行使』。

たちはならん
橘 蘭。

律の母親であり、封印のことを知っている一人。刃と同じく知っていることを黙っていることに罪悪感を抱いきつとも舞夏達を支えていた。

容姿は大和撫子という言葉がしっくりくる美人で性格も容姿に相応しいものを備えている。学生時代はその美貌から高嶺の華だつたのだが、同じ学生だつた刃が性質の悪い連中に絡まれているところを圧倒的な強さで叩きのめしたその姿に惚れたのを機に積極的にアプローチをしかける。たちはな橘家の秘密を教えられてもそれを受け入れてそのままゴールインした。

久遠の初恋の人であり、今も久遠はこの人に頭が上がらない。ちなみに、久遠の初恋の人だという事実を律と悠璃は知らない。

あがみ
亜神 莉里。

あまなり
魔法を教えるための施設、天鳴学園の学園長であり最高責任者。常にゴスロリの服を纏い、仕事のための部屋を自分の趣味に合わせて改装するもそのことに何ら疑問を抱いていない。

無類のイヌミミ好きであり、久遠のイヌミミを見て自分の家に泊めることを強制させ家に久遠といるときは攻撃されようと何をされようと四六時中堪能するほど。

あまりのしつこさに久遠が辟易としてそこらへんの犬の耳や犬型の妖魔の耳で我慢をしておけと言ったところ、『イヌミミが人についていることで発生する萌え』に関して半日ほど語り続けた。久遠が無理矢理中断しなければ一日中語ってもまだ足りないほどに好きらしい。

芒^{すすき} 沙羅^{なひ}。

天鳴学園に勤める教員の一人で莉里が信頼する部下の一人。学園では理論を専門として教えているが、実力も折り紙つきであり優秀であることから莉里の世話役を周りから押し付けられた苦勞人。久遠と律、絢香のクラスの担任である。

クロ。

鳥型の妖魔。主に久遠と他の人物間の連絡係、後始末をしており、久遠のパートナーとして多くの地をまわったよき理解者。久遠が警邏に入隊した頃からの付き合いであり戦いの中で苦しみながらも成長していく姿を見守り続けてきた。最近の悩みは久遠に関する悩み事を何故か相談されることらしい。

舞「っと、これで全部か？」

虚「そうですね。今のところはこれで全員です。莉里さんや沙羅さん、クロに関しては特性をまだ決めていませんのでここには書いていません。それにここに書いた設定も現時点で私が決めていること

なのでこれから先、物語が進むと何かを追加することもあるかもしれません。」

舞「……久遠を狙う女がこれ以上増えるのは？」

虚「決定事項です。」

舞「よし、虚言。少し向こうで話し合おうか？」

虚「全力で遠慮させてもらいます。あつ、アンケートは引き続き実施していますのでどんどんというか、容赦なくというか、とにかく送ってくださると私も嬉しくて作品を書く筆が進みます。では、また次回の番外編で。（シュバツ）」

舞「あつ！コラー！あたしからもアンケートの件、よろしく頼むっ！じゃ！また機会があれば会おうな！虚言！！待ちやがれ！！（ダツ）」

番外編 ここまでの設定。 （後書き）

アンケートは引き続き実施しますのでどんどん送ってください。

第十一話

『事象技能へイマジン』

Side Ritu（前書き）

私生活が忙しくて更新が出来なくて申し訳ありませんでした。やつと落ち着いてきたので執筆を再開しました。期間をあけたので出来が落ちているかもしれませんがご容赦下さい。

そして、アンケート締め切りに伴いタイトル、キーワードの変更、そしてあらすじもついに変更しました。

第十一話

『事象技能ヘイマジン』

Side Ritu

君がいなくなつてからボクは剣にすがつた。稽古をしながら君と稽古をしていたときのことを何度も思い出した。いつもいつもボクの練習に付き合つてくれた君を一番鮮明に思い出せたから何度も何度も剣を振るつた。その剣を通して、いなかった君を見ていた。そして、今君は剣を通さなくてもここにいてくれる。それならこれからのボクの剣は君のために捧げようと思う。今は贖罪しゅくざいでも、いつかは別の意味でこの剣を君のために……。

Side Ritu

動きやすい服装に着替えて無駄に広い構内を歩いて第三訓練場に辿り着いたときにはすでに多くの生徒たちが集まっていた。

「わっ、すっごい広いつ。」

悠が言うように一クラスが大体40人だから、三クラスで約120人近くいるにも関わらずまったく狭くないというか、向こう側の壁すら見えないって広すぎじゃない？

「地図ではこんなに広くないはずなんですが……。」

絢香も持っていた生徒手帳に記されていた構内の地図との誤差に首

を傾げた。

「空間を捻じ曲げて拡張してるんだ。その証拠に壁にびっしり魔術^{サーキット}刻印が刻んである。・・・まったく、これだけのものを使ってどれだけ金をかけてるんだか。」

「魔術^{サーキット}刻印？」

「魔力を注ぐと一定の効力を表す図形だ、魔法陣のようなものって言えば分かるか？」

「何とか・・・。これだけの金って言ったけどそんなに高いの？」

「魔術^{サーキット}刻印が刻まれた物質を^{マテリアル}刻印素材つつうんだが、作るのに馬鹿みたいに労力が必要なんだ。そうだな・・・、このだけの質のものならここから十メートルでざっと百万か？それを地図縮尺の通りの空間の囲いに使ったならここだけで少なくとも一兆は確実にいってるだろうな。」

「一兆！？」

「俺も専門外だから詳しくは分からないが最低限それぐらいはあるはずだ。」

『講義を開始しますので生徒はこちらに集合してください。』

予想外の金額に驚いているとそんな声が響いてきたので、ボクたちは生徒たちが集まっているところに向かった。

「皆さんの実技の講義ではそれぞれのクラスの担任である三名。私、

1 - Fの芒 沙羅と1 - Cの仙木 樹先生、1 - Eの九十九 一二二
三先生が担当します。よろしくお願いします。」

「仙木だ。これからお前たちに教える力は一步間違えれば大きな被害をもたらす。それをよく覚えておけ。」

「・・・（九十九 一二三。よろしく。）」

芒先生の紹介を受けていかつい顔をした大男である仙木先生と無口無表情で文字が書かれたスケッチブックを持った白髪の幼女、九十九先生が自己紹介をしたんだけど・・・、

「何でスーツとジャージとゴスロリ？」

何故か芒先生がいつもと変わらないスーツ姿、仙木先生はそこらへんに売っていきそうなジャージ姿、九十九は白いゴスロリ服で何ともおかしい組み合わせだ。

「生徒相手に真面目な装備を整えるわけないだろ？だから、あれが普段着なんだろうが・・・。悠、お前確か一二三のクラスだろ？いつもあの格好なのか？」

「ゴスロリじゃないけど、ひふちゃんはいつもコスプレだよっ。」

「そういえば、以前に九十九先生は学園長とゴスロリ服について話し合っていたことがありました。」

「あれの同類か・・・。」

くーちゃんが呆れたように息をはく。

「では、まずはすでに力の使用の経験がある人は仙木先生のほうへ集まってください。」

そう芒先生が言うのと集まっていた生徒の半数以上が仙木先生のほうにいつてしまった。

「え？こんなにいつちゃうの？」

「親が力を持つと子も力を持つことが多いからな、親にでも習ったんだろう。むしろ、親がそうじゃないのに力を発生させることが珍しい。」

「あれっ？くお君はいかないのっ？」

「別に俺は焦って上達させるつもりはないからな。自己申告制ならお前らと一緒にいるほうがいい。」

「やったっ。くお君と一緒にだっ。」

悠が嬉しそうにくーちゃんに抱きついた。

「さて、こちらにいる人達にはまずは自分の特性クオリティを知ってもらいます。」

特性？えっと、前に別の講義で聞いたような……。

「魔法、魔術、法術、仙術、妖術、超能力、神秘、様々な名称があるが、魔力を使ってイメージを具現化する現象は総じて『事象技能イマジン』と呼ばれ、『事象技能イマジン』の発動には『事象技能イマジン』によってどのような

な事象を起こすことに向いているか、いわゆる優性属性を示す特性
が必要……。律、こんなことも覚えてないのか？」

「あはは……。そ、そんなことよりどうやってそれを確かめるの
？」

「沙羅が説明するだろ。」

沙羅って、さっきの九十九先生のときも呼び捨てにしてたけど先生
を呼び捨てにしているの？

「クオリティ特性を知ると言ってもそんなに難しいことはありません。一度
『イマジン事象技能』の感覚を捉えれば自然と自分の力が頭に思い浮かびま
す。」

「え？ そうなの？」

またボクだけ分からないのかと思ったたら悠と絢香も知らなかったよ
うで不思議そうにしている。

「久遠君は何でだか知ってますか？」

「そついう法則だからだ。」

「くお君も知らないのっ？」

「そついうことじゃない。全ての世界の礎、至高概念とも呼ばれる
『ファースト四柱』のうちの一つ、万物の法則を司る『ロー法則』がそついう風に
法則を世界に定着させてるんだ。だから、そこに余計な因子も過程
も含むこともなく『クオリティイマジンの感覚を捉える』。『自分の特性を理

解する』という方程式が $1 + 1 = 2$ と同じように簡単に定まっている。」

よく分からないけど、難しく考える必要がないってことだね？

クオリティ
「特性を知るためにはまずは『事象技能』^{イマジン}がどのようなものであるかを頭で知り、次に感覚で理解してもらう必要があります。今まで勉強だけをさせていたのはそれが理由です。」

今までさせてくれなかったのにもちゃんと理由があつたんだ。

「今回、感覚で理解させることで皆さんの力を目覚めさせます・・・。
・。【彼方より来たれ祝福の光、此方より去れ災いの闇、眠り子に目覚めの時を与えよ、息づく者に安息の眠りを与えよ。』へブンスドア』。」

言葉が終わると同時にボク達の上から大きな光が瞬き、上を見上げると大きな光の雲が広がっていた。それを呆然と見上げているところから光の雫が雪のようにひらひらと舞い落ちてきたのでそれを手に乗せてみると雫はその手の上で溶けるかのように消えていった。

「これは・・・。まさか『滅亡の空』^{ラストスカイ}だったとはな・・・。」

「『滅亡の空』^{ラストスカイ}？」

「沙羅の通り名だ。といっても、沙羅がそうだとは思わなかったが・・・。そんなことより感覚は掴めたか？」

「え？えっと、どうしたらいいの？」

「さあな？俺のときは自然と知っていたからどうしたらいいかと聞かれても分からない。」

「光の雫に意識を集中すればいいみたいですよ。」

絢香が困っていた私にそう言ってくれたので私も降り注ぐ光の雫に意識を集中した。

「絢香はもう終わったのか？」

「はい。知っていたものと『先見予告』^{ミフラス}という力みたいです。」

雫に意識を……。

「重複者^{ホルダー}だったのか。」

「重複者^{ホルダー}、ですか？」

何か不思議な感覚が……。

「特異特性^{イレギュラー・クオリティ}を複数持つ人間をそういうらしい。俺も複数持っているが、人という定義を考えると外れるな。」

これが『事象技能』^{イマジン}……？

「くお君っ、私は『魔力回収』^{サイクル}っていう力なんだってっ。くお君はっ？」

「ん？俺か？元から持っていたのは『位相微剥』^{アウトウオーカー}だ。」

私の力は、『魔法行使』と……、

「『封魔相克』……?」

浮かんだ単語がつい口から漏れた。

「りっちゃんの力は『封魔相克』っていうの?」

「え、うん。あと、『魔法行使』っていうやつ。」

「『魔法行使』は固有特性だから言わなくても分かってますよ。」

インヒューレント・クオリティー
「固有特性?」

「やっぱり覚えてなかったんだっ。」

つてことは、それも授業でやったことなんだ。

「種族ごとに必ず生まれ持つ特性のことだ。人間は『魔法行使』がそれに当たる。」

「それなら」

「ただ、『魔法行使』はそれ単体では『事象技能』を使えないつつ欠点があつてな。もう一つ特性を持たなければ機能をしない。」

人間全員が『事象技能』を使えるんじゃないかと言おうとしたのだが、それを予測していたかのようにクーちゃんに遮られた。

「そして個別に目覚める特性が特異特性と言って『事象技能』を使

「う大抵の奴はこれを持つてる。少数だが血統特性ブラッド・クオリティつつ遺伝する特性クオリティを持つ奴もいるがな。」

「へえ〜〜〜。」

「それと自分の特性クオリティはあまり言いふらさないほうがいい。特性クオリティは優性属性を示すこともあつて知られれば、手の内を明かすようなものだ。」

「……（その通り。）」

「あ、ひふちゃんつ。」

何時の間にか近くに来ていた九十九先生がスケッチブックをこちらに見せながら立っていた。

「……（編入生？）」

「ああ。一応自己紹介しておこう。銀牙 久遠だ。敬語は必要ならつけるが？」

「……（別に。あなたは何でこっちに？）」

「知り合いの近くにいたいただけ。別にいいだろ？」

九十九先生はくーちゃんのその問いに頷く。

というか、さつきからスケッチブックに文字が勝手に浮かんだり消えたりしてるんだけどあれも『事象技能イマジン』なのかな？

「にしても、三人とも面倒な特性だな。」
クオリティー

「面倒って何で？」

「優性属性が分かりにくい。」

「そういえば、確かに。」

「そうだな………。絢香は解析系、悠璃は大規模系、
サーチ
律は封印系と俺は見たんだがどう思う？」
ファイルド

「……（里見ちゃんは吸収系、魅宗ちゃんは幻術系、橘ちゃん
アフソープ
は解呪系も大丈夫だと思う。）」
ディスベル

「どっちにしる最初に何をさせるかに悩むな。」

振り仮名までつけた細かい芸を見せた九十九先生が頷く。

「そういうクーちゃんの優性属性は？」

「俺は作用系と解呪系だ。」
アクション
ディスベル

「だったら、解呪系の何かを見せてよ。」
ディスベル

「そうだな……。一二三。」

九十九先生が頷くと同時にスケッチブックに鎖が浮かび上がったか
と思うと、次の瞬間には鎖が実体化してくーちゃんに巻きついた。

「喋らないから予想してたがやっぱり無声行使か。」
サイレント

「無声行使？」
サイレント

「『事象技能』イマジンは普通はさっきの沙羅みたいに詠唱をするんだが、今みたいに詠唱を省く高等技能のことを無声行使サイレントつつうんだ。」

「……（詠唱はイメージを明確にするための自己暗示。低、中位の事象技能なら省くことも可。）」
イマジン

「かと言って、今みたいに系統の中でも高位の創造系クリエイターを無声行使サイレントでやるのは普通は無理だから一二三の特性が関わってるんだろっけだな。」
クオリティ

「……（黙秘。）」

「で、だ。解説系ディスペルはイメージ自体は難しいことじゃない。ただ解説する対象がどれだけ強固にイメージされたか、特性クオリティがどれだけ解説に優性を示すかに大きく左右され、解説に優性を示さない奴と優性を示す奴では大きく効果に差が出る。」

「……（解説系の優性者は重宝される。）」
ディスペル

「俺も解説系ディスペルに優性を示しているとはいえ、結界、魔法陣への効力に特化しているからな、優性を示さない奴が百の力、俺が十の力で『事象技能』イマジンを打ち消したとしたら律は一の力で同じことが出来るだろうな。代わりに俺は何もしなくても結界、魔法陣を無効化できるがな。」

「……えっと、つまり？」

言われたことをうまく理解できなかったので聞き返した。

「お前は解呪の力がとびぬけてるってことだ。俺が今からやることももっと簡単にこなせるだろうな。・・・【朽ち落ちろ、事象は虚に還る。『還元』】。」

くーちゃんに巻きついた鎖が粒子に分解されて消えた。

「と、まあ、こんな感じだ。練習には誰か術をかける奴がいらないから俺が付き合ってやろう。」

「悠ちゃんにも教えてよつ。」

「あの、私もいいですか？」

悠は不満そうな顔で、絢香はおずおずとくーちゃんに頼んだ。

その申し出をくーちゃんが断るわけもなく、三人でくーちゃんに教わることになったのだが二人きりで教わる事が出来なくて内心、がつくりしたのだった。

第十一話

『事象技能へイマジン』

Side Ritu（後書き）

久々の更新になって今回はやっとこの作品での魔法、『事象技能^{イマジン}』を登場させることが出来ました。前書きでも書きましたが、前半と後半を書くのに期間が空いたために文章が変化してるかもしれないがご容赦下さい。

さて、今回、アンケートを集計した結果、タイトルは圧倒的に『狼の誓い』に決まりました。といっても、アンケート全体の票数が少なかったんですね。まだ十話でアンケートを実施したのが無謀だったのでしょうか。こんな拙い作品を呼んで頂いている人達のためにもっと精進したいと思います。

ご意見・ご感想を随時お待ちしております。

第十二話

下準備

Side Kuon (前書き)

この回は2826文字、今までのと比べると少し少なめですが、お楽しみ下さい。

第十二話

下準備

Side Kuon

戦いに身を投じたのは俺の意思だ。俺がどれだけの恨みを受けようとも、どれだけ手が血に染まるうとも、どれだけ人から遠ざかるうともそうなることを望み、戦い続けた。そんな力でもお前たちを護り、導けるのなら俺はその力を誇りに思う。

Side Kuon

イメージを発動するために必要不可欠なのが想像力だ。強固な術のイメージを構築しなければどんな術も発動しない。そういうことでまずはイメージを常にイメージ出来るように精神集中の訓練をしなければならぬ。

「くお君もついいでしょっ？」

「まだに決まってるだろ。まだ始めて五分も経ってないだろうが。」

訓練として座禅を始めて、予想通り最初に悠璃が根をあげ始めた。

逆に絢香は莉里に『精神感応』^{テレパス}の制御の訓練を受けていたからか静かに続けている。

「……………」

そして、律だけは立たせたまま木刀を構えさせて瞑想をさせている。律にとって一番集中出来る時というのはこうして剣を構えているときだから下手に座禅をさせるよりこちらのほうが効率がいい。

おじさんも俺がまだ『僕』だった頃からそういうふうには律を仕込んでいたし、精神集中に関しては俺より年季のある律は絢香と比べてもそうとう深く集中している。というか、精神集中だけなら所詮は我流の俺より優れているだろう。

そういうわけで後は悠璃さえうまくいけばいいのだが、騒がしい気質の悠璃が座禅を長時間維持できるわけもなくどうしたものかと思う。

「くお君は座禅しなくていいのっ？」

「俺は既にある程度 of 感覚を掴んでるから問題ない。」

「くお君も最初は座禅をやったのっ？」

「……いや、違うが。」

「じゃあ、くお君と同じ方法でやりたいっ。座禅は悠ちゃんには合わないんだもんっ。」

「……………止めたほうがいい。」

「どうしてっ？」

「……いきなり血に飢えた獣の群れに放り込まれて生と死の極限状態に追い込んで開花させるやり方だぞ？もちろん、失敗すれば死ぬ。」

しかも、放り込んだ張本人はそれを遠見の術で覗いて人の命の危機を笑って楽しんでやがった。思えば、最初からあのクソ女狐はドSだった。主人も何であんな奴に俺を預けたのだろうか？

「……やっぱり座禅でいいつ。」

「その方が賢明だ。」

かと言って、このまま変わらずに座禅を続けさせても時間がかかるだろうな……。

「そうだな。あと三分以内にうまく集中できたら何かご褒美でもやるつか。」

「……。」

「切り替えが早いな……。」

ご褒美の言葉を聞いた途端黙って集中し始めた元・妹に呆れて溜息をつく。

それにしても一度、集中し始めたら結構深くまで集中するな。これなら次の段階に進んでも問題ないか。

「ちよつといいか？」

「ん？」

三人に声をかけようとする後ろから声をかけられた。

そこにいたのは茶色い髪で赤が若干混じった黒い瞳をしていて杖を持った男子生徒と彼より背が低く彼の後ろに隠れるように少し長めの前髪から伏し目がちにこちらを見ているこちらは青色が若干混じった黒い瞳をしている男子生徒だった。

「何か用か？」

「先生にあんたから教えてもらえって言われたんだが……。」

「……沙羅か？一二三か？」

「二人とも。」

俺が二人のほうを見ると

「……（よろしく。）」

『使える者は猫でも使わせてもらいます。その三人も順調のようですから二人ぐらいついでに見てください。ちなみに拒否権はありません。』

一二三はスケッチブックをこちらに向けて、沙羅はテレパシーで二人を押し付けてきた。

あいつらも他の生徒を相手に能力を開花させるのに苦労しているのは分かるが、仮にも生徒に生徒を任せるとはどういうつもりだ？

「……はあ。まあいい。俺は銀牙 久遠だ。お前等の名前は？」

「俺は瀬木寺せきじ 鐘紀しょうき。よろしくな。」

「す、慧すいノ宮のみや 菊きく……。よ、よろしく……。」「

「こっちこそよろしく頼む。だが、あまり期待するなよ？ たいしたことは教えられないからな。」

菊は相変わらず鐘紀の後ろに隠れたままで自己紹介をして、一応あとで失望させないように先に言っておいた。

「とりあえず、座禅からやってもらおうか。」

「あ、いや、一応、俺は力を使ったことはあるんだ。」

「ぼ、僕も、つ、使ったこと、だけなら……。」「

気まずそうに視線を二人。何か嫌な予感がするんだが……。

「そうか？ なら……。おい、三人共、もういいぞ。」

俺が声をかけると精神集中していた三人がこっちを見る。絢香が二人の姿を見て俺に問いかけた。

「そちらの人達は？」

「沙羅達に任された。こっちが瀬木寺 鐘紀で、そっちが慧ノ宮 菊。」

「よろしくな。」

「よ、よろしく……。」

その後、律達も自己紹介をしおえる。

「くお君っ、ご褒美はっ？」

「後で何か一つ言うこと聞いてやるから考えとけ。」

「やったっ！な～に～を～さ～せ～よ～う～っか～なっ？」

悠璃が喜んでいるのを流して他のやつらに声をかける。

「今度は集中した状態で自分が起こしたい現象を強くイメージする。その際にそのイメージを強くするために言葉にして自己暗示をかけると成功しやすくなる。これが詠唱になるわけだが、これは同じような術を使っても人それぞれその術をどのようにイメージするかによって変化する。だから、自分のイメージをそのまま口にするとい
い。」

「と言っても、何をすればいいのさ？」

律の疑問に答えるように準備を開始する。

「【芽吹きの大地を侵略せしもの、その姿は清らかなる園、その真実は敵を討つ城『ハンターガーデン』】。」

大地に干渉して植物の成長を促進。 あっという間に胸の辺りの高さ

まで草木が育ち、コンビニくらいの広さの範囲まで『ハンターガーデン』の効力を制限したのでその大きさで変化は終わった。

「これを使ってそれぞれ課題をやってもらう……、どうかしたか？」

「あ、いや、くーちゃんがこれをやったと思ったら驚いちゃって。」

「さっき、『還元』を見せただろう？」

「規模が違いすぎるって……。」

律の言葉に絢香と悠璃も頷いた。

「さっき、期待するなって言ってたけど十分だと思うぞ……。」

鐘紀の言葉に菊も頷く。

「教えるのは得意じゃないんだよ。で、これを使ってそれぞれ俺の出した課題をやってもらうからな。」

鐘紀と菊は別として律達には何をやってもらうかは考えてあるからな。それをやらせるとして、鐘紀と菊は優性属性を聞いてから何をさせるか決めるか。幸い『ハンターガーデン』は結構応用が利くからどうにかなるだろ

第十二話

下準備

Side Kuon（後書き）

前書きにも書いたとおり、今回はいつもと比べて少なめなのですが、どうだったでしょうか？内容としても薄めであり面白くなかったかもしれませんがこのまま話を続けると長すぎるような気がするの
で一旦、ここで区切らせてもらいます。

今回、新キャラでやっと男を出しました。とりあえず、久遠の味方側のキャラはこの辺で打ち止めにします。また物語が進めば増えるかもしれませんが、当面は出さないつもりです。といってもいつも思いつきで書いているので何時新しいキャラを出すか分かりませんが。

ご意見・ご感想のほう随時お待ちしています。

第十三話

訓練1

Side Kuon and Ritu (前書き)

今回は計3719文字です。

第十三話

訓練1

Side Kuon and Ritu

それは償いの第一歩。それは自分を御する第一歩。それは愛しき者への第一歩。それは成長への第一歩。それは変化への第一歩。この一歩が彼らにどんな未来を及ぼすのか、それは誰にも分からない。・・・。

Side Kuon

『ハンターガーデン』の中央、草のクッションで作られたベッドの上で寝そべっていると人が領域内に侵入してきたのを感知したのでここまでの道を草木を操作して作り上げる。

「随分と派手なことをしましたね。」

「別にたいしたことじゃないだろ？」

「私達から見ればそれでも生徒達から見れば十分派手ですよ。」

沙羅が呆れたような表情で俺を見る。

「他の生徒の指導はいいのか？」

「指導できることはもうしましたから後は本人達が感覚を掴むのを待つだけです。何かあれば九十九先生もついています。」

「で、俺のところに来たのはあの二人のことか？」

「それもありますが、橘さんとあなたのことです。」

体を起こして沙羅に向き直る。

「……まあ、流石に知ってるか。」

「ええ。六法家のうち遠い昔にその姿を消した封魔の『断刃名』^{たちばな}。彼らに流れる血に宿った血統特性^{ブラッド・クオリティ}、『封魔相克』^{バンシユ}。それが彼女にあらわれたということは、」

「ああ。あいつは『断刃名』^{たちばな}の末裔だよ。あいつ自身は六法家や血統特性^{ブラッド・クオリティ}に関しては何も知らないけどな。」

「……彼らが姿を消す直前、最後に関わった事件は『四柱』^{ファースト}が一角、『魂』^{ソウル}との戦闘。『四柱』^{ファースト}で唯一その姿を現したかの存在は狼をかたどっていたと言われています。」

「そうだな。実際、主人は狼の形態をとっていたよ。」

「やはり、あなたは……。」

「推測どおり、『魂』^{ソウル}の眷属だ。」

別に隠しても意味のないことなので素直に吐いた。

「『一匹狼』^{アウター}……。」

「俺のことを知ってもらえているなんて光栄だな、『ラストスカイ 滅亡の空』。」

「噂は流れてましたから。『ファースト 四柱』の眷属が現れた、というものが。そして、あなたと戦場で戦ったこともありますしね。」

「戦った、か。『ヘブンスドア』による一方的な攻撃で俺が逃げ回っていただけだろ？」

「その間に部隊を三つも潰され、目標も奪取されました。」

「目標を奪ったのは警邏^{うしよ}じゃなくて、『ロイヤルナイツ 神々の近衛』だ。」

「それでもあなたがあの部隊を潰さなければ私達、『チルドレン 大地の御子』のものでした。」

「俺だって目の前で掠め取られて悔しいのは一緒だ。……それとも、俺がそのときに殺した奴らの仇討ちでもしたいのか？」

「いつでも襲いかかれるように『ハンターガーデン』をスタンバイさせる。」

「……まさか。そんなわけないでしょう？この世界にいる以上、命を失うことなんて皆覚悟の上です。恋人でもいたならまだしも生憎、私には長年そういう人が現れませんでしたから。」

「……仇討ちに來た奴がわざわざ敵のテリトリーに何の準備もなく入らないか。」

「そういうことです。ただ思い出して愚痴の一つでも言っておこうと思っただけです。」

緊迫した空気をといて『ハンターガーデン』の警戒態勢もとく。

「そういえば、あの二人、鐘紀と菊だが、あいつらの特性、まさか六法家と関わりがあるのか？」

「ええ。『焰神』と『水都』の分家筋にあたります。といっても、末端の末端ですが。『断刃名』をみるならついでに思いました。」

「けど、あれは……。」

あの二人のことを思い出して眉をしかめる。

「ええ。血は引いているので血統特性は受け継いでいるのですが、どうにも……。」

「才能がない……、というより、精神面に問題があるのか、あれは。」

「そうです。改善を何度も試みたのですが、それもことごとく失敗に終わって環境が変われば何か変化があると思ったらしいのですが。」

「それだと俺にはどうしようもないぞ？」

「先生方による教育も既に試みて失敗しているので、力を覚えたりかりの同世代の子と一緒にしてみればいいんじゃないかと思いましたが、まあ、しばらくは様子を見ましょう。」

「結局、俺がしばらく世話をしないとならないのか。」

面倒を新たに抱えて、これからの苦労を考えて溜息をついた。

「……………あいつらの様子を見てくる。」

「どうぞ、頑張ってください。」

沙羅に背を向けて、草木を操作して出来た道を歩き始めた。

~~~~~

S i d e   R i t u

くーちゃんに課題を言い渡されて、大分経った。

「【朽ち落ちろ、事象は虚に還る『還元』】。……………何でも起きないかな？」

くーちゃんと同じようにやったのに力が発動した気配は微塵もしない。

「はあ……………。ちょっと疲れてきたな。でも、座れないし。」

そう言いながら自分の足元を見ると地面から生えた草がボクの足を縛り付けて動けないようにしている。

木刀で切りすてようとしてもその草は強化の術がかかっているらしく、全然びくともしない。

くーちゃんに与えられた課題はこの草にかかっている術をとくこと。ただそれだけなのだが一向に成功しない。

集中はちゃんとしている、イメージもしっかりと構築した。なのに、成功しない。何が悪いのかも分からないのでただ闇雲にやるしかない。

「よし。もう一回。……【朽ち落ちろ、事象は虚に還る『還元』】。」

……変化なし。

「はぁ……。ほんと何でだろ？」

「当たり前だ、馬鹿。」

顔を上げるとくーちゃんが呆れた顔をして立っていた。

「馬鹿はひどくない？」

「いや、馬鹿だ。俺が何て言っただか聞いてなかっただろう？」

「ちゃんと聞いてたよ。集中だったした、イメージだってちゃんと作った。でも、ダメだったんだよ。」

「それだけか？」

え？まだあつたっけ？

「……同じような術を使うにしても術者が違えば詠唱は変わる。自分のイメージをそのまま口にすればいいって言っただろうが、お前が使ったのは俺の詠唱、俺のイメージ。それじゃあ、術が発動するわけないだろ。」

そういえば、そんなことを言っていたような気がする……。

「お前にとつての力を打ち消すイメージ、そして、それを表す言葉じゃないと力は発動しない。それを考えるんだな。……俺は他の奴を見てくる。」

くーちゃんはボクに背を向けて歩き出そうとする。

「ま、待つてよ。そんなこと言われたってよく分かんないって。何かヒント頂戴よ。」

「……そうだな。お前がおじさんから習ったことでも参考にするといい。」

「父さんから教わったこと？」

くーちゃんはそのまま去っていつてしまった。

「父さんから教わったこと……。剣？」

剣術が何でイメージの役に立つのかな？……ううん、それだけじゃないはず。剣を通してボクは父さんに何を教わった？……あ、

『いいかい、律。僕らが振るう剣は誰かを傷つけるためにあるんじゃない。降りかかる災いを振り払うためにあるんだ。全てを焼こうとする炎が迫ろうとするなら火種がなければいい、全てを押し潰そうとする濁流が押し寄せようとするなら水が流れないようにすればいい、全てを吹き飛ばそうとする風が襲い掛ろうとするなら風が吹かないようにすればいい、全てを崩そうとする地震が起こりそうなら地震が起きなければいい。え？何が言いたいのか？ははは、ちょっと分かりにくかったかな？殴られそうになったら殴られないようにすればいい、蹴られそうになったら蹴られないようにすればいい、要は何か災いが迫ったらその原因を無くせばいいってことだよ。僕らの剣は災いの原因を無くすためにあるんだよ。』

原因を無くす……。

足に絡みつく草を見る。

この草がボクに絡みついている原因は？くーちゃんがそういう術を使ったから？……いや、違う。……草にそういう術がかかっているからだ。じゃあ、術が発動している原因は？……くーちゃんが使ったから？……それもあるけど、求めている答えはそれじゃない。……魔力？

「魔力を、無くす……。」

そうすればこの草はただの草だ。

あとはそのイメージを形作ればいい。

剣を構えて集中力を高める。

原因を無くす．．．．．魔力を．．．．．どうやって？．．．．．  
ボクの剣で．．．．．魔力を無くす．．．．．魔力を振り払う．．．  
．．魔力をふりはらう．．．．．魔力を振り抜う．．．．．。

「．．．．．【災いよ、去れ『断禍』】。」

イメージを乗せた一振りを絡みついた草に向かって振り下ろした。

## 第十三話

### 訓練1

### Side Kuon and Rit u (後書き)

訓練風景を書いてみました。前半の關係ない部分が一度説明したことをもう一度説明したりして長々となつてしまい、申し訳ありません。

次回は律を除く面々の訓練風景を書こうと思います。楽しみにしていってください。

ご意見・ご感想の方は隨時お待ちしてます。

第十四話

訓練2

Side Ayaka and Yurii (前書き)

計3688文字です。

第十四話    訓練2    Side Ayaka and Yurii

自分を苦しめるこの力が疎ましかった。誰も信じられない、誰もが醜いものを抱えている、そんなことは知りたくなかった。けれど、現金だけど今はこの力に少しだけ感謝したいと思う。

少しでも君の傍にいたくて、少しでも君の役に立ちたくて、少しでも君の見ている世界を見たくて、少しでも君を支えたくて、少しでも君に愛されたくて、こんな理由で頑張ってるって知ったら君はどう思っかな？きつと、呆れたようどこか嬉しそうに受け入れてくれるんだろうなあ……よしっ、頑張ろっ。

Side Ayaka

精神集中までは莉里さんとの精神感応テレパスの訓練でやったことはあるのですが、そこから先、イメージを固めることが中々うまくいきません。

久遠君に与えられた課題はこの草むらに隠されたものを見つけるといっただけのものです、こういうイメージをすればいいのかよく分かりません。

久遠君にアドバイスを聞こうとする前に彼は行ってしまったので、

試行錯誤してみますが全く手ごたえがありません。

「……………駄目です。何も浮かんできません。」

詠唱にしても元となるイメージがなければ浮かんでくるはずもなく、  
途方に暮れてしまいます。

「絢香？」

「あ、久遠君。」

そこにやつと久遠君がやってきてくれました。

「どうした？全然、力を使った気配を感じないが？」

「どうした？じゃないですよ。いきなりやれと言われても出来るわけ  
ないじゃないですか。」

「いや、莉里と訓練したんだったら少しは出来るかと思ったんだが。」  
「

「やったのは精神感応テレパスの制御だけです。術のイメージは少しもやった  
ことなんてないですよ。」

「そうなのか……………まあ、どっちみち、最初は自分でどう  
にかしようと試行錯誤させたほうがいいらしいけどな。」

「らしい、というのは？」

「俺に力の基礎を叩き込んだクソ女狐の言い分だ。真偽のほうは知

らないがな。」

久遠君は忌々しそうに吐き捨てました。

そういえば、さっき、いきなり戦場のご真ん中に放り込まれたとか話されていましたので多分、久遠君が言う女狐というのはそれを実行された人なのでしょう。

「それはともかくイメージで詰まってるのか？」

「はい。具体的にどうイメージすればいいのか分からなくて……」

「確かに解析系サーチは分かりにくいな。」

「久遠君は解析系サーチは使えるんですか？もしよかったら参考にしたいのですが。」

「使えない事もないが、俺もそうだが大体の奴は特性クオリティを元にイメージを組むから参考にはならないぞ。」

「久遠君の特性は確か位相微剥アウトウォーカーでしたか？」

「そうだが、解析系サーチのときに使ってるのは別の特性だ。クオリティ 言っておくがそれについては喋るつもりはない。」

少し不満ですが、先程特性はあまり吹聴するものではないと言っていましたので仕方のないことだと思い、我慢することにしました。

「絢香の特性は精神感応クオリティと先見予告テレパスだったな。とりあえず、そこか

ら考えてみるのがいいんじゃないか？」

「そうですね……。あ、久遠君が前に言っていた、私と同じで心を読む方はどんな風に術を使っていたんですか？」

同じ力を持っているなら参考になるのではないかと思い、尋ねたのですが久遠君は顔をしかめました。

「……………あれは参考にするだけ無駄だ。感覚で術を組む、生まれながらに常識の外に存在する化物だからな。」

「……………あの、その人はどういった人なんですか？」

久遠君は更に顔をしかめると渋々といった風に口を開きました。

「……………金毛白面九尾。他者を弄ぶことを生きがいにしてるクソ女狐だ。」

「九尾の狐……………」

あまりに有名な妖怪の名前が出てきたので驚いてしまいました。

「ともかく、クオリティ特性を元に自分で考えてみるんだな。俺は他を見ている。」

そう言って久遠君は行ってしまいました。

クオリティ特性を元に考える、ですか。

テレパス精神感応とラプラス先見予告ですから、聴覚と視覚、でしょうか？

いえ、<sup>テレパス</sup>精神感応の場合、聞くというより感じるという感覚がしますから、<sup>ラフ・ソース</sup>先見予告のほうはまだよく分かりませんが、同じようなものなんでしょうか？

ということは、感覚的なものなのでしょうか？

しかし、感覚で探すというのはどういう感じなのでしょうか？・・・  
・・・視覚というのは外界から光を感じることで得られるもので、  
聴覚というのは音、つまりは空気の振動を感じてすることで得られる  
ものですから、何かを感じればいいのではないのでしょうか？

・・・魔力、でしょうか。

「・・・【在りしもの、その存在を示せ。『ファインド』】。

」

S i d e      Y u u r i

集中して、イメージして、

「【全部纏めて吹き飛んじゃえつ。『烈風のノイズ』】っ。」

風が吹き荒れて辺りに生えていた草木を根こそぎ引き抜いてはるか

頭上へと吹き飛んで行っちゃった。

その出来に満足していると、上から吹き飛ばした草木が落ちてきた。

あ、どうしよう。考えてなかった。

「【その命、果てるまで衰退せよ。『枯渴の刻<sup>こく</sup>』】。」

落ちてくる草木がどんどん枯れていき地面に戻ってくるときにほとんど塵と同然になって戻ってきた。

「あ、くお君っ。ありがとねっ。」

「少しは周りの被害を考えて術を使え。」

声のほうを向くと呆れた顔のくお君がいた。

「それにしても、悠璃が一番でこずると思ったんだがな。」

「すごいっ？偉いっ？」

「ああ。たいしたもんだ。」

私の求めているものをすぐに分かってくれて、苦笑しながら頭を撫でてくれたっ。

あゝっ、やっぱり、すっごく気持ち良いっ。

「律達はそれなりにてこずってたんだが………、才能でもあったか。」

「悠ちゃん頑張ったもんつ。」

「悠璃みたいな性格のほうが柔軟に思考が出来るからかもな。」

ずっとうして撫でていて欲しいなつ。

……あれ？

「くお君っ？」

「どうした？」

「嫌だった……？」

私の頭を撫でるくお君の表情はどこか残念そうに見えた。

私が問うと一瞬、腕が止まりその後、もう一度撫で始めた。

あつ、さっきより気持ちいい。

「……まあ、嫌だな。」

「どうしてっ？」

「……才能があるってことはそれだけ戦いの場に立つことが多くなる。特に大規模系が得意な奴なんてもんはなおさらだ。人間と人外の連中じゃ根本的にスペックが違いすぎる。その差を縮めるために色々人間は手を尽くすわけだが、大規模系の火力は人外と戦うのに有効だ。」

撫でる手に恍惚としてしまいながらもくお君の言葉に耳を傾ける。

「沙羅なんてその最たるもんだ。広域殲滅事象技能、『ヘブンズドア』。あれによって葬られた集団、集落、部隊は数知れず、人外の一部の間でもあれが発動したとき術者の姿が見えないなら逃げると言われてるほどだ。だがな、それだけ危険視されているってことはそれだけ命の危機にさらされているということでもあり、それだけ多くの戦場にかりだされてるってことだ。……俺は、お前にそんな危険な目に合わせたくない。だから、素直にお前の才能に喜ぶことも出来ない。」

くお君の言葉を聞いてどうしても伝えたいことがあって、撫でられて気が緩んでしまいそうになりながらもしつかりとくお君の眼を見つめる。

「……くお君が護ってくれるでしょ？ 悠ちゃんをありとあらゆる危険から護ってくれるでしょ？」

「もちろんだ。けど」

「だったら大丈夫だよ。悠ちゃん、くお君を信じてるもん。それにね、悠ちゃんはくお君に護られるだけは嫌なんだよ。だから、この才能が凄く嬉しい。くお君に護られただけじゃなくて、くお君を護れるから。くお君を傷つけようとするものを薙ぎ払えるから。護って護られて、支えて支えられて……くお君はそんな関係は嫌？」

くお君はあつけにとられた顔をしてから微笑んで私の頭を乱暴に撫でた。

「わわっ。」

「俺を護ろうなんて百年早い。」

そう言つて、私に背を向けて歩き出す。

嫌だつたのかな……。

「お前には指一本触れさせないさ。何が敵だろうと関係ない。有象無象の脅威は全部俺が潰す。……お前のその言葉だけで十分俺は支えられてる。ありがとな。」

くお君は一度、足を止めてそう言つと今度こそ行つてしまった。

「……えっと、お礼を言われたつてことは喜んでくれんだよねっ？」

「……よしっ、もっと頑張ろっ。」

というわけで、今回は絢香と悠璃の訓練風景でした。と言っても、悠璃は既に自力で開花していたので訓練していませんが。

私に文才がないばかりに訓練と言いながらそれぞれの雑談がメインになってしまいますが、どうかご容赦下さい。

ご意見・ご感想のほうは随時お待ちしております。

第十五話

訓練3

Side Syouki and Kiku (前書き)

今回は計3182文字です。

## 第十五話

### 訓練3

S i d e   S y o u k i   a n d   K i k u

焦りは失敗を呼び、失敗は焦りを呼ぶ。何年も同じ事を繰り返し、その度に失敗をして焦る。だから、落ちこぼれと言われ、劣等感を抱き、それでも馬鹿の一つ覚えのように努力をした。ここに来て何かが変わるだろうか？

力を持たずに普通の家庭に生まれたかった。血筋が僕を束縛し、僕を力へと縛り付ける。力が必要だけど、僕は力を好きになれない。  
・  
・  
・  
・  
・

S i d e   S y o u k i

いつものことだ。何度繰り返しても、何度も同じことが起きる。

「【力をもって踏み荒らせ『赤の舞踏』】。」

杖の先から炎が放出され、前方にある草木を燃やし尽くす。

というのが、俺の中でのイメージ。

現実には杖の先からライターと同じくらいの火がとまり、前方へと進んでいって草木に当たると少し焦がしただけで消えてしまう。

どんなイメージを思い描こうとも現実ではほんの小さな火を出すことしか出来ない。

何度やってもだ。そのせいで俺は一族の落ちこぼれとして、何度も悔しい思いをした。

年下の子供が俺よりも大きな炎を出しているところを見たときなんかは自分が惨めでならなかった。

それが焦りと呼び、その焦りが更に失敗を呼び寄せる。分かっているのだけど、この焦りを自分では止めることが出来ない。

「順調、ではないか……………」

「銀牙。」

この異常発達した草木を作りだした銀牙が俺の杖の向けられた先にあるほんの少しだけ焦げた草木を見て言葉を濁した。

芒さんにこいつのところに行けと言われたときは不満がなかったわけじゃなかったが、同時に仕方の無いことだとも思った。

今までも何人もの人間が俺の才能の無さを見限って俺を見放してきた。今回もまた同じことだと分かっていた。

だけど、そうじゃないとすぐに分かった。

こいつが一般人じゃないことはこの『ハンターガーデン』を見てすぐに分かった。それも『焰神<sup>えんじん</sup>』の分家筋である俺よりも深くこちら側の世界に関わっているのだろう。

「なあ、さつきからあっちのほうででかい音がすんだけど何かあったのか？」

「あれは悠璃だ。何のアドバイスもなしに開花するんだから天才なんだろうな。」

天才。俺が最も嫌う人種だ。あいつらは何の苦勞も無く、俺が必死に手を伸ばしている場所を軽々と越えていく。

「まあ、他人は他人。お前はお前だ。あまり気にすることもないだろう？」

「……………そうだな。」

他人と比べて自分の才能の無さを嘆くのはもう飽きた。

「さて、はっきり言わせてもらうが俺からお前に言えるアドバイスはない。」

「おいおい。」

「だから、感覚で覚えてもらう。もう一度、力を使ってみる。」

そう言っただけの俺の背後に移動する銀牙の言葉に訳が分からないが従ってみる事にする。

「【力をもつて踏み荒らせ『赤の舞踏』】。」

さつきと同じように杖の先に小さな火がとり前進していく。

「【誰の意味も汲まず災禍は広がる『バーサーク』】。」

銀牙が俺の肩に手を置き詠唱をすると、小さな火がイメージで作り上げた炎と同じくらいの大きさに膨れ上がり前方の草木を燃やしなから進んでいった。

「……………」

「まあ、こんなもんだろ。あとはこれを再現できるように頑張れ。」

俺がこの結果に驚いていると銀牙が俺の肩から手を放して去っていった。  
こうとした。

「ま、待てよ！何をしたんだ？」

「何、少しお前の力に干渉しただけだ。そういうことが出来る特性クオリティーなんぞな。」

銀牙が去っていった後、燃やした草木を見ながら他人の手を借りたとはいえまともに術を行使できたことに喜び、あの光景が脳裏から薄れないうちに再び、訓練を再開した。

僕は生まれたときからこの力が好きじゃなかった。

生来から気弱な性格である僕は誰かに対して傷つけるような行為はひどく苦手だった。

もちろん、力が誰かを傷つけるためだけのものではないことは知っている。

けれど、やはり力というものはその大半は誰かを傷つけることが出来るものであり、傷つけない力だとしてもその力によって与えられた情報や結果を元に別の誰かが誰かを傷つけてしまうと考えるとどうしても好きになれなかった。

でも、好きになれないからと言っても『水都<sup>みなと</sup>』の一族の一員として力と付き合わないわけにもいかない。

嫌々ながら力を使っているからだろうか、力はいつもうまく発動しない。

「【染み渡れ、潤いと癒しの雫『キュアドロップ』。】」

目の前の枯れている草木を術によって発生した水の膜が包むが、その水が草木に吸収されても枯れていた草木は依然とそのままで変化が無い。

いつも術が失敗したときはホッとしたような、残念なような変な気持ちになる。」

術が使えないのは僕個人の好き嫌いとしてはよかったのだが、一族の一員としては力を上手く使えなくて残念に思ってしまう。

同じように力がうまく使えない瀬木寺君は僕とは真逆の理由、力をうまく使いたいがゆえの焦りによるミス、だと知ったとき力が好きではない僕は曖昧に相槌を打つことしか出来なかった。

「はかどってるか？」

「ぎ、銀牙、君。ご、ごめん、その、あんまり。」

「別に謝る必要はない。」

銀牙君を九十九先生に紹介されたときはあまり積極的に力を学ぶつもりはなかったので正直ホッとした。

自分のペースでゆっくりと必要最低限の力を覚えられれば十分だった。

そういう点では銀牙君の放任的なやり方はすごくありがたい。

「もう一度、力を使ってみろ。」

「わ、分かった。」

僕の背後に回った銀牙君の言葉に従ってもう一度力を使う。

「し、【染み渡れ、潤いと癒しの雫『キュアドロップ』】。」

水の膜が枯れた草木を包み込む。

「【誰の意味も汲まず災禍は広がる『バーサーク』】。」

銀牙君が僕の肩に手を置いて詠唱をすると、さっきは何の変化もなかったのに今度は水が吸収されると枯れていた草木がみるみると元気になっていく。

「あ……………」

術が成功して嬉しいような、残念なような複雑な気分になる。

「菊？」

「あ、えっと、その、ど、どうも、ありがとう。」

「……………力は嫌いか？」

「え！？えっと、その、いや、」

「そんなに慌てなくても別に嫌いなのが悪いつつってるわけじゃない。」

僕がいきなり思っていたことを当てられて動揺していると銀牙君は苦笑した。

「俺だってこの力をあまり好ましく思っていない。力があるから争い

が起こるし、力を持つものは争いに巻き込まれる。本当は力のことを知らないまま田舎で平凡な生活を送っていたかったさ。」

「じゃ、じゃあ、どうして………?」

「知ってしまったから、だろうな。力の存在を。それで俺の大事な奴らが傷つくかもしれないことを。あとは生きるために必要だったってこともある。………力を嫌うならそれはそれでいい。だが、お前の血筋が争いから遠ざかることを許さないだろ?」

「あ、み、『水都<sup>みなと</sup>』のことを………?」

僕の疑問に銀牙君は頷いた。

「いざというときに何も出来ない、大事なものを護れない。そうなたらそのときのことを一生後悔するのはお前だ。そうならないためにも嫌いなままでいいから受け入れられるようになればいい。」

「き、嫌いなままで、う、受け入れる………。」

「俺はそうやってきた。………さて、また律でも見てくるか。頑張れよ、菊。」

去っていく銀牙君を見送って、しばらく彼の言葉を反芻していた。

ほんの少し、ほんのちよつと、ほんの僅かにだけ、前より頑張れる気がした。



## 第十五話

### 訓練3

### Side Syouki and Kiku (後書き)

というわけで、今回は新キャラの鐘紀と菊の話でしたがほとんど会話がなくてすいませんでした。

何だか最近ネタがなくなってきたと段々と難産になってきました。今後は更新が今まで以上にゆっくりになったり、内容が薄くなったりするかもしれませんが頑張って更新していくつもりです。

ご意見・ご感想のほうは随時お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5669e/>

---

狼の誓い

2010年10月10日12時25分発行